毎月十日廿日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治三十年八月十日發兌

第百七號

夏期大附録

金賞牌　名譽金賞牌　名譽金賞牌　金賞牌



受領　受領　受領　受領

◎蜂印香竄葡萄酒

登録商標　はち印





本品は内外各大博覧會に於て夥多の賞牌を受領し就中海外大博覧會より得たる金賞牌は上掲の如し近來葡萄酒の種類多き中に其品質の卓絶なるは喋々を要せずして瞭然たり

本品は最も滋養分に富み之を日常の飲料とせば血液能く循環し食物能く消化して精神常に活潑となり殊に其味甘美にして何人の口にも適せり

本品は全國到る處に販賣店あり蜂の商標と近藤利兵衛の名義を篤と御認めの上御最寄にて陸續御購求あらんことを希ふ

東京日本橋區本町二丁目九番地（電話本局四四三番）

賣捌元　洋酒問屋　近藤利兵衛

抑も**人造合成金**なるものは理化學的の作用を以て或る藥品と高貴の金屬とを溶解混和せしめたる**文明的工藝品**にして光輝澤色殆んど純金と異ならず數年を經るも退色の憂なく金光燦爛として澤色の艶麗なるは誰れ人も舌を卷く所にして實に學理の巧妙驚く可き也持に京極商店取賣品は細工の精緻と巧妙とを以てし加るに多量の純金を化合したれば金光眼を射り永年金銀を扱ふ當職の人と雖も到底純金と鑑別し能はず近來歐米諸國に賞揚せられつゝあるは則此の人造合成金也

▲博多織帶地絹組物打物金屬細工物營業

●東京銀座三丁目西角

京極商店





●正價（指環）一圓一圓半二圓二圓半三圓（時計鎖）三圓半 四圓 五圓六圓七圓八圓（煙管）四圓半五圓五圓半六圓七圓（簪）一圓一圓半二圓二圓半三圓（中さし）二圓半三圓三圓半四圓（根掛）一圓一圓半二圓三圓（男帶止）二圓半三圓三圓半（眼鏡）二圓半三圓三圓半四圓（羽織紐環）五十錢六十錢一圓

●尚量目輕く形狀細き物は安價に出來ます

右之外寶石入撿印付定紋付石目槌目蛇卷き指輪根掛帶止等の彫刻物其他磁石寶入金具等の細工物なも御好次第調進す

◉爲替は銀座局へ取組み乞ふ（郵券代用は一割増）全國無逓送料都合に依れは代金引替小包郵便にても送品す

大改良

國民新聞

看よ!! 來る九月一日後の紙面を看よ!!!

每號八ページ（又臨時十二ページ或は十六ページ）

定價

		地方郵税
一枚	二錢	五厘
一ヶ月	四十錢	十三錢
三ヶ月	一圓十五錢	三十九錢
六ヶ月	二圓二十五錢	七十八錢
一ヶ年	四圓四十錢	一圓五十六錢

從前の通

廣告料

一行の代價左の如し（但五號活字廿二字詰）

一回 十五錢　二回以上十四錢　五回以上十二錢

從前の通

發行所　東京市京橋區日吉町四番地

國民新聞社

家庭雜誌

定價表（次號より改正）

	前金	市外郵稅共
一冊	拾錢	十一錢
六冊	五拾七錢	六拾三錢
十二冊	壹圓八錢	壹圓貳拾錢

十二冊以上一冊九錢の割市外は別に要郵稅

廣告料　一行（五號活字廿四字詰）　一行八錢

家庭雜誌　九月以後毎月一回十五日發兌

本社電話番號本局七十番

發行兼印刷人　吉崎四吉
編輯人　金子佐平
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

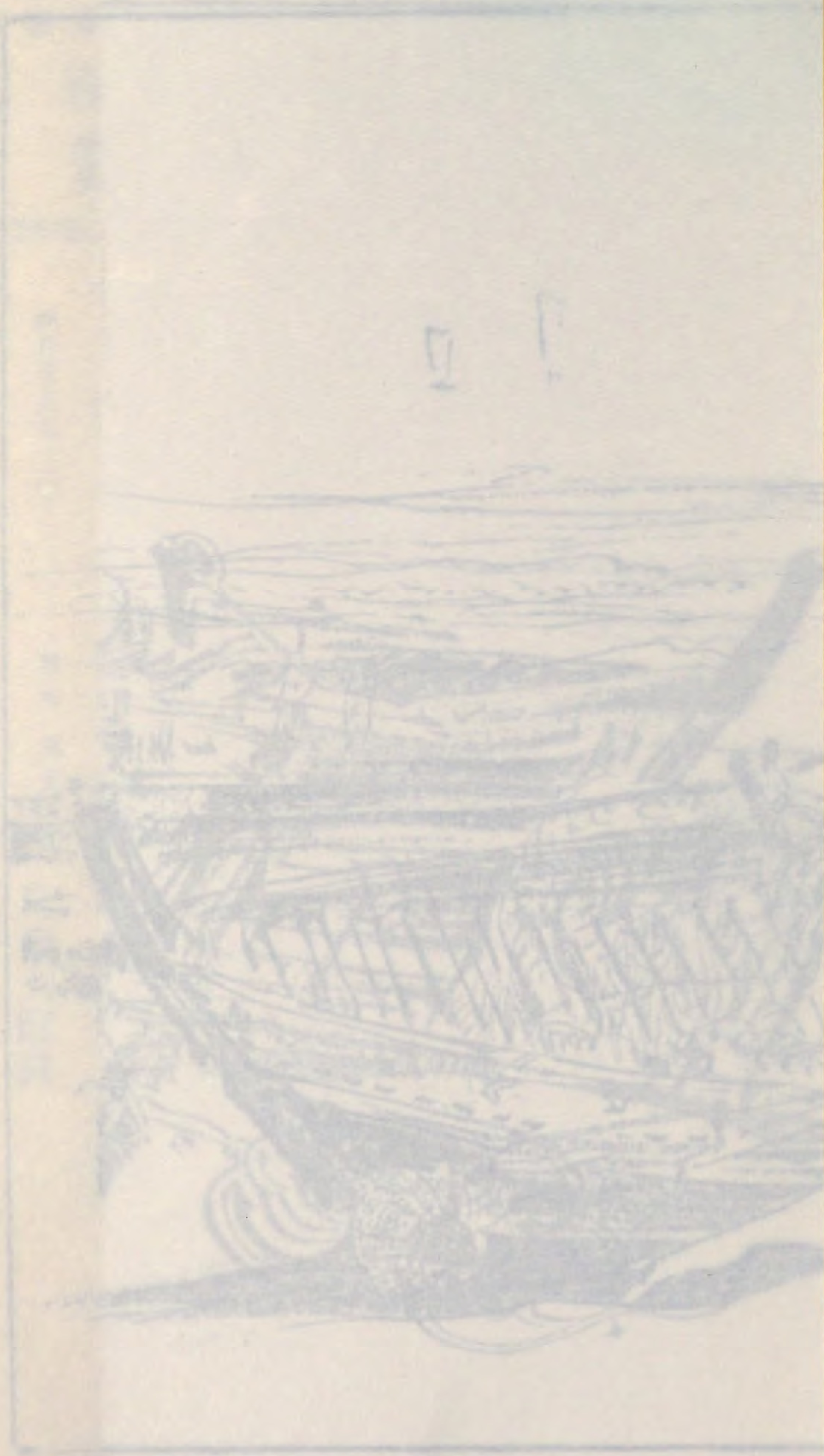
明治三十八年十月八日發行

家庭雜誌第百七號

目録


米僊

食物の改良



家庭雜誌第百七號
(明治三十年八月十日發兌)

社説

食物の改良

健全なる精神は健全なる腦髓に宿ると云へり。實にも身躰にして健康ならずんば、心の働きも自ら十分なる能はずして、第一に德の働きの健康なるを得ざるは勿論、智の働きも亦健康なるを得ず、不健康のある種類たとへば肺病の如きに至りては、感覺過敏にして、時に尖銳なる情の働きを示すことなからずと雖、そは固より燈火滅せんと欲して忽ちに明かなるの瞬間に過ぎざる也。

古より大事洪業を成したるものを見るに、多くは精力絶倫にして非常に根氣の強く、而も其根氣を多年間持續するに足る程の健康を有し、相應に長生したるもの也。縱令長生せずとも、根氣の强からぬものにして大事を成したるは一人もあるべからず。而して根氣の强きは一般に身躰健全にして而も躰格よきものに多きならひたり。

軀幹の大小の如きも、時としては小軀幹に大精神を宿すものなからずと雖、是れ寧ろ例外にして、通例は大なる軀幹のものにして、こゝに大なる事を成し得べき筈なるにあらずや。

此等の點よりして日本人を見るに、英人露人等の我に對して幾んど比較の限りにあらざらんと欲する程の巨き躰格を有することとは、言ふまでもなく、西隣の支那人さへも一般に日本人に比して實に羨むに足るの躰格を有するを見る。

然りと雖、此くの如きものもと人種上の相異より來れるものにして到底人力の奈何すべきにあらずとならば

詮なし。去れども必ずしも然るのみにあらずして、隨分歷世の養育何如により之を左右し得べきもの少なからず。就中食物の撰擇の如きは特に其關係の小少にあらざるを知る也。第一に肉食國民と躰格との關係を見よ自ら思ひ半に過ぐるものあるべし。

今我が陸軍兵卒の躰格を觀るに、平均

		年齡（年）	身長（尺）	胸圍（尺）	肺活量（立方仙米）	呼吸縮張差（寸）	躰重（貫）	握力（瓩）
近衛師團	第一期	二〇、〇四	五、三六	二、七一	三一二六、一八	二、四三	一五、二三	三七、三三
	第二期	二一、〇五	五、三八	二、七八	三四八六、六一	二、四八	一六、六三	四三、四九
第一師團東京營	第一期	二〇、〇五	五、三一	二、六七	三一五六、二四	二、一三	一四、八二	三四、七二
	第二期	二一、〇五	五、三四	二、七九	三三八二、二五	二、五九	一五、六〇	四三、七五
第二師團仙臺營	第一期	二〇、〇四	五、三八	二、八二	三五一〇、四三	二、四三	一五、八八	三七、二八
	第二期	二一、〇四	五、四〇	二、八四	三五八二、三三	二、五五	一六、五三	四五、一八
第三師團名古屋	第一期	二〇、〇六	五、三七	二、七七	三四三一、一七	二、四一	一五、一七	三四、六一
	第二期	二一、〇六	五、三八	二、八二	三五九四、八〇	二、六四	一五、八九	四〇、三六
第四師團大坂營	第一期	二〇、〇四	五、三七	二、七三	三四一六、二七	二、一一	一四、八〇	三六、〇七
	第二期	二一、〇四	五、三九	二、七八	三六五七、五八	二、三二	一五、二二	三八、九三
第五師團廣島營	第一期	二〇、〇五	五、三五	二、七一	三三八四、二五	二、二一	一四、八五	三二、三五
	第二期	二一、〇五	五、三七	二、七九	三五四一、五…	二、五六	一五、五四	三九、一八
第六師團熊本營	第一期	二〇、〇六	五、三八	二、七九	三五〇四、四四	一、九八	一五、七三	三九、九一
	第二期	二一、〇六	五、三九	二、八四	三四四四、二七	二、二一	一六、三四	四三、〇〇

各分營は悉く之を畧す。檢査人員は、近衛五八三、第一師團東京營三一七、第二師團仙臺營三九二、第三師團名古屋營三五〇、第四師團大坂營三一〇、第五師團廣島營三一二、第六師團熊本營三五五也。記す所第一期は明治廿五年新兵入營の時、第二期は後一年後を云ふ。

にして、一年間に於て既に著しく躰格の進歩を見る。是れ固より操練によりて身躰を鍛へたるの効に因ること多きと同時に、食物の力も亦與つて効なくんばあらざる也。論より證據、日清戰爭の日、久しく滿州の地に在陣したるものが、戰役の艱苦と不攝生とに係らず肉食したるの結果、躰軀の豐肥を得たること、人の記臆に存する所にあらずや。

今我が國民が如何に肉食しつゝある乎を觀るに、牛肉

馬肉の食せらるゝもの實に下の如し。

屠牛屠馬數

	牛	馬
廿六年	一〇四七七二	三〇九九〇
廿五年	一〇〇六二九	二六八一七
廿四年	八九三〇六	二五八一七
廿三年	七六九一八	二四八三二
廿二年	八四七一一	二一二〇三
廿一年	八四七一〇	七七〇三

知るべし日本人の食牛數は約一年十萬頭、食馬數は約一年三萬頭なることを。若し牛一頭の肉を平均二百斤とし、明治廿六年度の屠牛數十萬四千七百七十二頭を四千一百卅八萬八千三百十三人の人口に配當すれば、毎一人一年の食牛量四斤強即ち四百八十目強なるを見ん。果して然らば日本人の食肉量が其餘りに多からざるを驚かずんばあらざるべし。

勿論邦人の食肉量が年一年に著しく增進し行くことは、統計の示す通りなりと雖、猶今日の食肉量にては國民體格の改良に顯著なる効果を見るべしとは思はれず。

吾人は日本人の體格改良第一として、食物改良を稱道し、食物改良第一として、一層肉食風の盛ならんことを希望して止まざるもの也。

史談

詩人ゲーテの母(其二)

英子

四、墺佛戰爭

千七百五十六年にはフリードリヒ大王兵を率ゐてザキセンに侵入し、フランクフルトには黨派の分裂を來し、ゲーテ外戚の祖父テックストルは墺太利に味方し、父はプロイセン國に左袒せしにより、舅婿互に敵となり、此がために眷族の中にいと苦々しき不和を來たしぬ。母は父に味方せんとせば、恩愛契をこめし夫に不貞と

なり、夫に從へば海山の高恩を受けたる父に不孝となるの境遇にありければ、其愛慮想ひやるだにあわれなり。されど又如何にもして、其間を圓滑ならしめむとて、心を盡し種々の策を試みしも皆効なかりき。既にして佛軍フランクフルトに攻め入りければ、忽にして市街は佛の軍隊を以て滿たされ、兵士は分かたれて各々民家に止宿せしめられぬ。ゲーテ家には伯爵トラン將軍の宿泊することゝなりたりしが、父ゲーテはプロイセンに左袒する者なりければ、己の家に敵をやどせしとて、甚だ不平に絶へず、事々物々トラン伯に對して禮を失し、粗暴の振舞のみなりき。母は之を見て蔭ながら大に心痛し、夫のために屡々トラン伯に就きて辨疏する所ありき。母初の程は全く佛語を解すること能はざりしゆゑ、通譯官によりて言葉を通ぜしといへども、せめては必要なると丈にても、自ら意を通じ得ん者と、通譯官より佛語を學び、遂に之を能くするに至りぬ。此の頃の事なるが、一日知己の許に洗禮の祝事ありて、テキストルも其女婿ゲーテも同じく招かれけるが、平常よりの悪感情を抱ける兩人の間に、ふと爭論起り、遂にテキストルはゲーテを目がけて、小刀をなげつけ、ゲーテは腰刀を拔く迄に至りしかど、幸に其場の人、兩人をなだめ事なきを得たることもありしとぞ。時に佛國民は盛に演劇を興行し、晝夜の別なく同市を賑はしたりければ、小ゲーテは之を見物せんものとの念絶えざりしも、父始の程は之を許さゞりしを以て、如何ともなす能はざりき。然るに父は彼の日一日と佛語を解する機敏を認め、遂に利益する所他に多からんとて、彼の請を許し、自由に參觀することを得せしめぬ。時に某なる者、彼を導きて樂屋に紹介せしを以て、深く劇場裡に入り込むの便を得て、他日の萌芽は茲に兆しぬ。當時彼は漸く十歳の童子なりしが、ヨセフと其兄弟てふ句を作り、之を父に呈せしに、父

は大によろこび今や其子に就きて心密かに望む所ありき。

五、ウォルフガングの敎育と其交際

佛軍の退去せしは、千七百六十一年のとなりしが、其滞陣につきて、傳染病大に流行し、千七百五十七年のとなりき、生れて漸く六歳になれる幼弟は、之がために空しく奪ひ去られ、慈母の悲哀はいと深く、其涙の未だかわかざる内に、三歳になれる幼弟も、亦た葬られたりければ、一家はさながら燈火の消へたらん如く、寂寞として皆涙にのみくれ居たり。今生き殘れる者とては、詩人と其愛妹コルネリア一人とはなりぬ。されど母エリサベットの信仰は確然として動かず、自ら慰めて以て家人の力となれり。又母の信仰は、寧ろ寛大にして淸らかなりしが故に、羅馬敎徒の如く、迷信に陷らざりしとはいへ、唯一の妄信せしものあり、即ち彼は事ある毎に、先づ聖經をとり、留針を以て之を刺し、其尖の留まれる所をさぐり、其處に記せる句を以て、己れに適へる辻占となしたり。是れ素より毫も信ずるに足らざることながら、彼には大に益する所多かりきとぞ。

偖ても光陰は矢の如く、とく過ぎて、千七百六十五年となり、小ゲーテもはや十六歳の青年となりければ、修業のためにとて、ライプチヒ大學に送らるゝ事となりて、今や家人は此の快活元氣よき家の光を去らしむるのやむを得ざるに逢ひぬ。其内にも取りわけコルネリアは愛兄の去るをばいたく悲しみたりき。ゲーテ去りて後は老父はこの一人の少女を専ら手にかけて敎育せんとなしけれど、其敎育法は前にもいへるがごと、嚴格に過ぎ、寧ろ苛酷に傾き、遂に憎惡の念を生ずるにまで至りたるを以て、愛兄の不在なるとて、憐にもコルネリアは日々怏々として樂まず暮しける。此の時、彼を慰めん者は、母夫人ならんとは、誰しも想ふ

べけれど、母夫人の許にても慰むを得ざりしは、元と母と娘との、互の氣質を異にせるが爲にて、和合慰藉の徴もなかりしは、重々の不幸といふべきなり。コルネリアは一種の不思議の性を有せしが、其教育によりて、一層憂欝の人となりぬ。其容姿の兄ゲーテの美貌に引かへ寧ろ醜なりしなども其一因なりき。ゲーテが妹を許せるの言に曰く「彼は大きく又優しき躰樣なれども、其顔に威あるにあらず、又美なるにあらず」彼を見む者は嫌惡せずとも、親まむとするの念を起す者もなかりき。さればコルネリア自身もよく之を知りて、常に若し美しくあらむには、他のものは悉く棄つるも、いとはじとかこちしとぞ。是れ復た彼をして益々陰氣ならしめし所以なりき。

小ゲーテはライプチヒに學ぶこと三年、其將に去らむとする數週前急に劇病にかゝり、一夜吐血すること、甚だし。其は彼が粗衣粗食して鍛錬せむと試みしためなりき。數日の間は生命もいと危く見えしが、幸にして少しく癒へしかば、父母の膝下に靜養せんとて、ライプチヒを後にして故郷へと急ぎけり。父は其子の學業進みたりとも見へず、容貌も亦憔悴せるを見て、多年の後始めて歸省せし愛息を見るも悦ばんとの氣色もなく、寧ろ叱咤せしが、母と妹は別して彼をいたはり、其溢るゝ如き、愛情は能く衰へたる青年の病を怠らしめき。この病苦の中にありて、最も彼が靈を慰めし者は獨り靜臥して既往を鑑みしことと、特に母の叔母に當れる、信仰深きクレッテンベルグ孃より受けたる、宗教上の莫大なる感化にてありき。孃は「ヘルンフート」教會とて、敬虔特に厚き、宗派に屬し、仰信深く、温かき情に富み、又た信仰を同うするがため、ゲーテの母とはわけて親密の交際ありき。既にして病も全く癒へければ、七十年父のすゝめにより、再び笈を負ひて、ストラスブルヒへ行きぬ。玆に止まること一年、

父の宿望も遂になり、ゲーテは博士の稱號を得、父母に見えんとて、故里さして旅立ちせり。歸り來れる後、彼は嘗て父の望みし如く、辯護士の業に從事なしぬ。コルデリアが當時有名なる著作家シロッセルと婚せしは其翌年なりき。

六、ウォルフガング、ワイマル朝に仕ふ

後一年即千七百七十四年、ゲーテワイマル大公爵に謁す。公は兼てゲーテの著書を愛讀し玉ふのみならず、種々の上奏御心にかなひければ、大に彼を採用せむと爲したまひぬ。ゲーテも亦甚だ之をよろこびて、ワイマルの朝に仕へ奉らんとなせしに、父は頭を振つて之を快とせざりしも、彼は遂に意を決して大公爵の求めに應じたり。此時にも母はよく其子の心情を洞察して、彼のフランクフルトを去りてワイマルの朝に仕ふる志望と、愉快を知りき。大公爵は彼を待遇したまふこと、特に厚かりしが、茲に困難なることとありしは、其地位に適ふ生計を立てざるべからざることにて、ワイマルの交際社會に出入せる、彼は大に經濟の困難を感じぬ。是に於て彼は此の事を母に告げたりしかば、母はこれをきゝ、父に告げず、密かに金策して、其急を救へりと、此のワイマルの新生涯に入りたる、ゲーテは若き大公爵と共に、舞踏會に臨み、或は痛飲し、又切りに此處彼處の宴會に侍せずといふことなかりき。されども彼は大に意を注ぎ、此の間にありてもよく彼の俗氣ある、カールアウグスト大公爵を、敎訓せむとし、機を見、折を伺ひては、專心此の若き公爵を補佐し奉りぬ。されば公と親近することも、益々深く、實に其間には肉親も及ばざるの關係を生じぬ。此の時よりは、ゲーテの名も、亦遠近に聞えて、交を結ばんとを乞ふもの、日々門に充ち、當時名聲赫々たるの士にして、彼を訪はざるの者とてはなかりき。然れども又貧窮孤獨の者を憐れみ、是等の人に遇へば、懇に此

を故郷の母君の許に送り導きたりき。母も亦大に此を喜びて、常に保護を與ふるを樂しき事とはなしぬ。

（未完）

文藝

稚兒の納涼

桐廼舍女史

茜さし、日影は西山にかくろひはて、光り薄き月の志ろう見え初しや、人も草木もよみかへれる心地して、庭に大路に水そゝけよ蚊遣たけよと、大人はなか／＼に事志げかるも、童子等の心はいと涼しげに、風かよふ門邊に床机、おしすゑて、三人り四人り打集ひて、氷もて遊ぶもあり、青柳の露にひとへ衣の袖ふりて「立まふべくもあらぬ身のなとうたへるもあり、およすけて見ゆれとさにはあらず、只いつらにてか聞おぼえしを心ともなくうたへるなめり、またいさゝたけのひたるが、軒端にてれる燈火のもとに、みどり子いだきよせて、ゑまひたのしむもあり、そが中にわきてゆかしう見ゆるは、八ッか九ッともおぼしきらうたけなるめのわらはは、姫百合の花ゑがきたるさゝやかなる團扇まさくりつゝ、螢こよと口すさひで打あふげと、都の空には待かひもあらぬを怨み貌なるぞをかしきに、流るゝ星かとあやまたるゝ影のこぼれ來しかば、あなやといひさまとらむとせしに、そは我籠よりもれしものよとて、十ばかりの男のわらは追ひつゝ、は志りかてに女の童子はうかさしにやふれけむ、鈴の音のすゞしきに秋の虫かとおどろかれて、見かへればゆくりなふめのわらはと、おもてあはせぬかれははなゑろみて團扇もて顔おほひつゝ、そかひになりしが猶ぬすむやうに見ゐたるはいかなる心にか、あやしきまでなまめかし、男のわらはは見らるゝにつけて、あしきこととゑてけり

とや思ひけむ、追ひ來し虫の事もわすれてつひゐたる
またをかし、月はやう〳〵すみ渡りて、晝の暑さは影
もとゞめぬ頃、彼方此方より母出來て、短夜のいたく
更ぬるにとくいねよとて、志ばしといふもきかず志ひ
てゐてゆきぬ、いはけなき心々にもあかすをしみし
が、なかばは母にすかされしや

足乳根の母のいさめにならひてや
こゝろ短かき夏の夜の月

とは誰れがうたひしか

夏の曙

いと子

螢と見へし星かげも、いつしか雲におふはれて、夜半より嵐ふきすさみ、板屋にはしる雨風いとものすごく、枕邊にかすかに、たてる燈火のきえかくるも心ぼそく思はれて、かたらふ友もなき身には、さびしさいとゞまさりゆき、短き夏のよもすがら夢も結ばでひがしの空のやう〳〵志らみゆくころ、おきいでゝ、つまどおしあけながむれば、いつしか空ははれわたり夜半のあらしはかげもなし、嬉しさにやをら庭におりたてば、朝東風かろき袂をはらひ、そのこゝちよさはつたなき筆につくされじ。

こけなめらかなる園のうち、そこともなく見わたせば、日頃めでにし草も木も色あせて、まがきのもとのあさがほの明日はいくつ咲きそろふかと、よべよりたのしみけるも水のあわ、露間の命はさりながらひらくもまたで志ほれたり。かくも萬の花はみな、枯野にのこる秋草の霜になやめるごとおれはてたる其中に他のみぎわの老松は老いてもかへぬその操、夜半のあらしに若みどり、なほいろ深くなりまさり雨のかたみか葉ずへに玉なす白露をいろどる朝日うつくしく其清き姿には明けくれ學びのともとしてたのみしかひのあらはれて

こよなう床しう覺えける

夜あらしに松のみどりの色そへて
朝凪きよき夏のあけぼの

小説

山むぐら

太田玉茗

（五）

其後健三は錢箱を見ても、客が拂つた札を見ても、欲しくて／＼胸が躍つて、山々攫むで取りたいのではあるが、人目が繁くて機會がない、よし又機會があつたところが、唯もう非常に恐ろしいので、動悸が高まつて手が震へて、足がすくむで近寄りえぬ。

欲しさはます／＼嵩ずるばかりで、錢が欲しいを思寝にねると、銀貨や白銅が雨の如くに、空よりばら／＼と降つてくる。一圓紙幣や五圓紙幣が、木の葉の如くに散つてくる。降るわ／＼散るわ／＼。健三は喜むで跳びまはつて、兩方の袂に拾ひあつめて、あゝ嬉しやと目を覺せば、四邊は烏羽玉の眞の闇で、はかない一場の夢であつた。若しやと懷を探つて見ても、兩方の袂を振つて見ても、元よりあるべき筈がないから、一個たりとも一枚たりとも、落ちもしなけりや出もせぬので、非常に失望落膽する。して又次にうと／＼と眠ると、何だか自分は大きくなつて、或商店の主人となる。金はどん／＼と湧いて出る。そこで立派な家を建て、立派な着物を拵へた上、約束通に妹を呼むで、二人で鷹揚に歩いてゐると、昔し自分を馬鹿にした奴らは、いかにも羨ましげにながめてゐる。健三はいよ／＼得意となつて、これ見よがしに誇つてゐる。

折しも暴風が遽かに起つて、家がめちや／＼に倒れたかと思ふと、鼠がちう／＼と噪いだので、端なく夢を

破られたのである。
夜はあける。番頭は健三に手車をひかせて、今日は牛込の方をまはれ、これは何屋へ何ダース卸せ、かれは何屋へ何コロス置け、何程拂つて貰つて來い、又催促をしてくるが可いと、一々委しく説明して、試驗をかねて早朝より出した。

其日は小春のうらゝかな空で、健三は神樂坂の得意先をまはり、品物を卸して、堀端へ出ると、向ふの土堤の松は霞むで水には鴛が遊むでゐる。こちらの土堤には草花が盛で、胡蝶が舞ふて戯れてゐる。風はそよそよと袂を吹く。鶯は歌ふてゐるらしく見える。妹は兄樣と呼ぶらしく聞える。

健三はほと〴〵茫然として、夢見たやうな心持であつたが、車夫の懸聲に驚かされ、蹄の音に膽を消されて、我にかへつて梶棒を握つて、市ヶ谷見附の方へ來ると、滊車は後より追つてくる。がらん〴〵と鈴は鳴る。

此春健三が送られて來たのは、川越よりの滊車であつて、妹は國分寺で青梅に乘り換へ、自分は其處で東京に乘り換へ、西と東へ相別れて、降りたところは市ヶ谷である、即ち此處の市ヶ谷であるから、さあもう乘つて行きたくて堪らぬ。みいちやんとこらは青梅の在で、青梅からは少しだといふから、乘りさへすれば直ぐに行かれる、行きたいな行きたいなと袂をさぐれば、豈計らんや銀貨がある、ちやら〳〵ちやんと音がする、音もする筈銀貨もある筈、建三は先刻得意先で、拂ひを受取つて來たのである。尤もそれは大金ではないが、慥かに二圓内外はあつた。

健三は袂に銀貨があるので、唯もう嬉しくつて嬉しくつて、自分の物だか人の物だか、主人の物だか誰の物だかそんな區別は眼中にない。これさへあれば行けるといふので、妹に逢ひたいが一心であるから、直ぐに車の梶棒をおろして、其まゝ停車場へ駈込むだが、急

いで切符を買求める、滊車に乘る、出る、烟を吐いて進行する。

健三は嬉しさに飛び立つばかりで、立つたり居たり坐つたり、腰を掛けたり外をながめて、野邊や山邊を見渡してゐたが、心は青梅の空へ飛んて、みいちやんところは何樣な處か、みいちやんは今頃どうしてるだらうか、行つたら何といふだらうか、どんな顏じて喜ぶだらうか、あゝいふだらうか、かういふだらうか、あんな顏するかこんな顏するか、見たい逢ひたい話したいと、いろ〳〵想像を畫いて見ては、遲いな〳〵滊車が遲いな、どうして斯樣に遲いんだらう、疾く行かぬか疾く行け、愚圖々々するなど聲立てゝ喚く。同車の人は膽を消して、皆一齊に健三をながめる。健三は平氣で喚いてゐる。

間もなく境國分寺を過ぎ、立川羽村の停車場も過ぎて、遂に青梅の町に達した。

健三はやをら車を出て、みいちやんは人形が好だつたから、買つてつてやらうと人形を買ひ、みいちやんはお菓子が好だつたから、買つてつてやらうと菓子を買つゝ、早く喜ぶ顏が見たい、家は何處だらう、どの邊だらうと、かの何某の村を尋ねて、只管其方へ足を進める。

其何某の村といふは、青梅町より一里ばかり奥で、晝は樵夫の木を斫る音、夜は梟の鳴く聲より外には何にも聞えない程の、寂しい靜かな山里である。

健三は道を尋ね〳〵て、やう〳〵其日の午後一時頃、妹が來てゐる村へ入つた。林はこんもりと茂つてゐる、長閑な日影は照してゐる、千草の花は咲きみちてゐる。鳥はあたりに囀づりかはして、此新らしい珍らしい客を、恰かも歡迎するらしく見えた。

(六)

小笹を分けて小唄を歌つて、椎の實拾ふ少女がある。

健三は其聲の妹らしく、其又姿の似てゐるので、
『そこに居るのはみいちやんぢやないか。』
少女が耳には聞えなかつたか、返事もしなければ振向もせず、可愛い聲で小唄を歌つて、頻に木の實を拾つてゐる。健三は進むで近寄つて見ると、いよ〳〵妹に相違ないので、嬉しさあまつてみいちやんと呼ぶ、みいちやん〳〵と續けて呼ぶ。少女は驚いて顏をあげて、見ると戀しい兄であるから、喜び叫んで抱きついて、
『兄樣〳〵どうして來たの、兄樣の來るのを待つてゐたよ、兄樣本統によく來たね、歸つて行つてはもう厭可だよ。』
健三は嬉しさに夢中であるから、何にも耳には入らないで、
『みいちやんお土產を買つて來たよ、これが人形でこれがお菓子。』
其二品を袂から出して、
『お前は人形が好だつたらう、えゝみいちやん。』
『妾は本統に大好よ。』
『それからお菓子は何だつたね、みいちやんはこれが好だつたらう。』
『好なの〳〵大好なの、兄樣本統にありがたうよ。』
先づ妹は人形を取上げ、顏をながめてにこ〳〵と笑つて、
『可愛いことね』。と胸に抱占め、そして幾度か頰摩して、じつと其又顏をながめる。健三は妹の有樣を見て、頗る心に滿足して、傍へに打笑むで佇立むでゐたが、
『みちいやんお菓子を食べさしておやり、人形も腹が空いたゞらうから。』
菓子を取上げて妹に渡す。妹は受取つて口に含むで、
『お泣きでないよ、お泣きでないよ。さあ〳〵お菓子をおあがりと言ふのに、何だつてそんなにお泣きだね。よし〳〵お腹が痛いのかい、それでは母樣とねんねし

やうね。』

兄様あすこへ行つて寝やう、こつちへおいでと手を曳いて行く。

開いた千草の野邊へ來ると、花はいろ〳〵咲き滿ちてゐる。可愛い小さな紫の蝶や、黄いろい蝶や赤い蝶や、白い胡蝶や黒い蝶が、落花の風に誘はるゝが如く、舞ふて遊むで戯れてゐる。妹はやをら其中に臥して、

『兄様は此子のお父様で、妾は此子のお母様よ、兄様もこゝへ寝るのさね、妾は此子を寝せつけるの、兄様疾く寝なさいつてば。』

兄は妹と對ひ合つて、雛を間に指夾むで寝る。妹は雛を懐にして、「坊やはいゝ子よ寝ねしな。」の、小唄をしばらく謠つてゐたが、

『兄様此子は寝たからね、起きて一緒に遊ばうぢやないか。』

さう言ひながら立ち上つた、兄も續いて立ち上つた。

『あゝ遊ばう。』と同意する。

二人は花を蹈みしだいて、負むだり負ばれたり逃げたり追つたり、虫を捕つたり喋を追つたり、興にまかせて面白おかしく、無心に無邪氣に遊むで居つたが、日はだん〳〵と山の端に沈むで、入合告ぐる頃となると、十七八の一人の女中が、孃様〳〵と呼びながら來る。お峯は遊びに夢中であるから、耳にも聞えず返事もせぬ。女中はお峯の側へ寄つて、

『もう日が暮れるぢやございませぬか、いつまで何をしてゐなさる、早くお歸りなさいませぬと、家へは入れぬとおつしやいましたよ。』

おいでなさいと誘はむとする。

健三の耳には其言葉が、恰かも破鐘の如く響いて、驚きあはてゝ直ぐに飛び出す、妹は兄様〳〵と呼ぶ。兄は妹の呼ぶにも關はず、元來し道へと走つて行く。姿は林中に隱れてしまつた。女中は様子を知らないから、

『孃樣はやく歸りませう。』と、無理にお峯の手を曳いく行く。お峯は兄樣〳〵と叫むで、涙ながらに曳かれて行く。

『孃樣あなた何ですね、あんな小僧を兄樣なんて、見ともないぢやございませぬか。さあ〳〵これからお湯をめして、御飯を食べて寢ましてね、又お話しを致しませう。』

女中はお峯を慰めすかして、やうやく門前に近づいたが、お峯は殆ど泣かむばかりに、泣聲立てゝ喚めいて來る。

『兄樣だから呼むでおくれよ、疾くよう〳〵。』

お峯が養家は農であるが、村内切つての素封家であるから、土藏は十棟も連つてゐる、下男や下女も十人はゐる、主人は五十の坂を越えて、妻は四十の坂を越えて、靜かに穩かに又樂しく、二十年來くらしてゐるが、子といふものゝ一人もないので、此春何某の周旋に依り、お峯を養女に貰つたのである。さればお峯を可愛がつて、大きくなつたら聟を取つて、何うしてかうしてあゝしやうなど、それのみ樂しみにしてゐる故、縱令しばしの間なりとも、姿が見えねば心配する。今日は女中と一緒だと思つて、主婦は安心して居つたが、女中は仕事をしてゐるので。

『お峯はお前どうしたね。』と尋ねる。

『妾はすこしも存じませぬ。』といふので、主婦は女中の不注意を責めて、早速迎に出したのである。

主婦は歸りの遲いので、氣が氣でならぬものであるから、戸口に佇むでながめてゐると、お峯は泣いて歸つてくる、女中は其手を曳いてくる。

『お峯やお前どうしたね、どうして泣いてゐるんだね。』

女中は主婦に辯解して。

『孃樣はおかしいぢやございませぬか、野原でどこか

の小僧とね、一緒に遊むでゐらつしやいましたが、兄樣〱とお呼びなすつて、お泣きになるのでございますもの。小僧は本統に變な小僧で、妾が側へまゐりましたら、すぐに逃げ出してしまひました。』

主婦は若しやと思つたから、

『お峯や兄樣が來たのかえ、本統に兄樣が來たのかえ。』

『東京へ行つた兄樣がね、人形やお菓子を買つて來たの。』

袂の中から其品を出して、

『はやく兄樣を呼むでおくれよ、よう母樣。』

かねて峯には兄があつて、東京へ年季に行つてゐるのを、主婦は聞いてゐるものであるから、兄とは必ず其兄であらう、とにかく何うして此處へ來たのか、年齡もゆかぬに一人でくるとは、何か仔細があるのだらう、呼むで仔細を訊ねた上、世話もしなければならぬと思つて、直樣人を青梅に出したが、更に行方は不分明である。

家政

肥滿に就て

黒田生

身體が分泌し排泄する量より多量の滋養品をとる時は肥滿す高等動物は幾んど只蛋白質を食して生活し得るものなりある生理學者は勞役する犬に殆んど脂肪なきものを考へて久しくその身命を維持し得たるを實驗したりと云ふ

人もし多量の蛋白質をとり只これのみにて需用を充すに足る如くし更に多量の肪脂をとるときは肥滿するなり記者は之を實驗したり何故に肥滿するかこれ蛋白質は殆ど皆な分泌すれど脂肪は體中に滯在して肥滿の素

因をなすによればなり

常に滋養品は蛋白質と同時に窒素を含まざるものを多くとれ何となれば無窒素物は皆な脂肪に變化すればなり



故に只肉類のみを食する人はその蛋白質が需用に餘る時のみ肉の肥滿をなすの時過量の蛋白質の多くは分泌し一分は沈むなりこれを見れば蛋白質は肉の肥滿する時に於てこの肥滿を變じて骨立の狀となすを得るなり

肥滿の原因は種々ありと雖も次の件大に原因をなす

（第一）生殖機能の減衰　月經の收閉復は肥滿するは婦女子の經驗に徵して明かならん

（第二）筋肉動作の不足　睡眠のみことゝなし運動不足するときは肥滿するもの多し

（第三）赤血球の減少　赤血球の減少は脂肪を增すものなり女子は多くは男子より肥滿すべし

（第四）飲酒　「アルコホール」を用ゆれば體中に肪脂の貯蓄を催かすなり西洋人特に獨逸人には往々麥酒肥滿とて飲酒の結果にて肥滿するものあり

（第五）精神を使用せざるもの　精神を使用せざるもの彼の痴呆の如きは然り

肥滿の療法　脂肪甚しきときは筋肉の勞働を充分ならしめ筋質を强壯にせよ輕き下劑例へば天然カルヽス泉鹽ナグソム位を頓服すべし又食物を節制就中脂肪質に富めるものを避けて飲酒を禁すべし食物の減少を一方

に偏するは策の得たるものにあらず次に精神を使用して腦髓を活かしめよ甚だ肥滿なるものは心臟痲痺卒中症に罹るものあり併し注意すべきは多少肥滿と雖も强ひて瘦を望む勿れやせ衰へ所謂骸骨然たる骨と皮との人間はたとへ如何に美麗なる風采如何に完全の良腦を有するも大事をなすを得べけんや婦女子の肥滿は勿論なりやゝもすれば不心得の婦女子あり記者大に感ずることあり此事を記す

火傷　　同

火鉢等の火の中に過りて手を入れ火傷することは屢々あることなり又衣服を着たるまゝにて火中にをつることもあり之を療治するには勿論醫師の診斷を乞はざるべからず、もし醫師その現場にあらざればまづ疼痛をかるくせしむべし先づ直ちに上より水を灌て冷し次て衣服を切るべし決して拔きとることをなすべからず水泡は切り開きても可なれども裂くべからず併し冷水に浸すときは通例疼痛を增加するものなるを以て最良なるは火傷せる部分に空氣を觸れしめずして防腐の效能ある藥劑を用ふるを第一とす

創面には阿麻仁油の如き清潔なる脂肪及び油を用ゆ又は硼酸軟膏或は「ザリチル」酸軟膏（何れも藥舖にありて其の價廉なり）幷に沃度仿謨末を用ゆれば極めて速に疼痛を鎭止するものなり何れにしても麻布に浸し用ゆその後布片を交換するときには火傷者は非常に劇痛を感ずるものなり何となれば布片は動もすれば皮膚に粘着すればなり最も謹愼すべし

甚だ蔓延せる火傷及び湯傷を被るものは全く安靜ならしめ成るべくだけその疼痛を少からしむべし特に小兒に於て時として深く欠伸し非常に水を飮まんと欲するものあり死に迫れるものなれば此時は全身溫浴を行ふ

時は死を免れ得ることあり、この時極めて迅速に醫師の治療を受くるを要す
凡て火傷者は暖室に入れ温暖なる食物を與ふべし
又强き酸類例へば硫酸硝酸鹽酸等を誤りて注ぎ掛しときは多量の冷水にてよく洗滌し手近にある炭酸曹達若くは軟石鹼の如き「アルカリ」類を以て中和すべし
軟石鹼とは肪肪酸と加里と水よりなるものにして決して曹達を含まざるものを云ふ曹達を含むものを硬石鹼と云ふ

酒と健康

同

酒の効用は「アルコホール」の作用なりこは一種の温度
「アルコホール」を飲用すればその百分中一乃至二、五は尿となり五乃至六は呼氣となり顯はるものなりその證には酩酊者の呼氣は一種の臭氣を帶ぶるなり

「アルコホール」は適當に用ふれば神經系を興奮せしむと雖も多量に用ふれば神經系を痲痺せしむこれ過度の刺激の爲めなり飲酒すれば血液循環迅速となるは心臟及び血管系統を興奮するによる筋及び神經の機能は活潑となる自然温暖を感す多量に用ふるときは血管痲痺により皮膚より温の放散增加して躰温



高山に於ては「アルコホール」の効能は甚だ弱しこれ氣壓の減少する爲め速に血液より排泄する所なり記者去

る七月十八日大雨を冒し學友土方氏も一番汽車にて新橋を發し相洲大山に登り試み翌々日函嶺中最高なる駒ヶ嶽に上り葡萄酒にて之を試みたり記者元來酒を好まず土方氏はよく飲す故に反對の二人が實驗せしに多少の差ありしも富士山頂にて之を試みなは正宗一升位領するものも二升位を平氣にて飲むを得べしとある人は云ふ

少量の酒を用ふるときは一時食をとらさるも勞働刻苦に堪へ病人に用ふるときは躰の組織の消失を遲からしめ大に大益なれども暴飲するときは神經の作用を鈍くなし胃腸を侵して精神と躰力と共に衰へしむ謹まざるべからず女子にして飲酒するものあれども必ず嚴禁するを望む

水の話

此の暑き夏の盛りに水の話をするは幾分か涼しく又た利益にもなることゝ思はるる故讀者みづに流さず一顧を賜はゞ幸甚

水の効用の汎く大なることは喋々するまでもなく、吾々身躰を組織する一部は此の水より成り又た飲料の全部は殆んど水で食物も亦皆之を含まぬものはないそれゆゑ吾々が平生身躰の健康を保護増進するに付て、他の食物と同じく飲料水に氣を附けなければ飛んだ病氣に罹ることがあります。今より凡そ二百年前の學者貝原益軒が養生訓と云ふ書の中に水は清く甘きを好むべし天よりすぐに下る雨水は性よくして害なしと申して居りますがその時分ですら水に就て注意をしたものである

偖て飲料としての水の種類を擧ぐれば雨水、河水、井水、泉水等いろ〳〵ありて其名の違ふ通り其性質も亦

多少の相異かある

雨水は地水の一旦蒸發して再び空氣中を通下するものなれば多量の空氣を含み酸素を含むこと多く又いろいろの凝固物即ち炭酸、硫酸、等又は少量の窒素性有機物を含み顯微鏡ならでは見えがたき植物の存在することありて時には又た木葉の如き碎片の漬溶するより不潔となることあるも此の如く汚染せられたるもの丶外は無害なる飲料水なれば良水の供給に乏しく又た水道の布設なき地にありては雨水を利用して飲料に供するが至極便利とす

然し製造業の盛に行はる丶市街或は不潔な屋根より流れ落つるものは塵埃等の混り居るゆゑ必ず濾過さなければならぬ



水の供給不足なる土地にては敢て汚水を用ゆるよりも雨水を利用する方が遙かに安全である、其方法は適當な地に滑かにして平な石を用意し動物の侵入らぬ樣に垣を造くり鐵管を以て市街に其貯藏へたる水を導き砂石を通して之を濾過すのである、又た田舍などにては藁葺屋根が多いから雨水を導き難けれども瓦類にて造れるものは、最初屋根を一掃し塵埃のなきを見て後ち石又は漆喰にて造りたる池中に導き前の通り濾過して貯藏ふべし(貯水池は後に説く)

泉水は地層より湧出るものにて溶解性と分解性とあるため數多の物質を含む、所謂鑛泉と稱するものは多く

の異物を含む故、醫藥としての外飲料としては用ゐざるを可とす、其温度は出處の深淺によりて異なるが淺泉は氣候の變化によりて變じ、深泉は一定の温度を保つものありて、白堊層、花崗石層、粘土板石層より湧く水は通例澄明清冽無害とす

●●河水は其成分甚だ複雜なるものにて季候及び四季の現象即ち雪又は氷の融解、降雨、洪水等の爲めにいろ〳〵變り、又た一つ河の兩岸にても水の性質の違ふことがある、それは水の流通る丶時植物性又は動物性の腐敗物若しくは排泄物を受け易く多量の有機物を混入し又固形物を含むからです、其休むことなく流動することゝ日光の作用に依りて有機物の酸化を助け無害のものと變ずことがある

●●井水は淺井水深井水の二つありて淺井水は地面水にて何處でも澤山得らるれど汚物を混有する恐れありて安全とは申されぬ、深井水は白堊層、花崗石層粘土板石層等より湧き出るゆゑに泉水の如く清澄である。

井水に鐵氣を含むものがあるが此の鐵氣を除くことは未だ發明されぬ、然し空氣に曝らして酸化すれば飲料とすることが出來ます世間で鐵氣を含むものは藥になるなど申せど金氣があつては飲料にはならないが鐵の必要量は有機化合躰となりて月々の食物の中に含み居る故强て無機鐵を取らんでもよいです

以上申述べし通りなる故健康水としては、無色無臭透明にして清冽美味なる泉水、深井水を第一とし、惡水としとしては溷濁にして游泳物多く黃色若しくは他の鮮色を呈し顯著なる味を有する淺井水地面水、又は汚水の注入する所の河水が危險である

蒸溜水は殆んど空氣を脱せるゆへ美味ならず又た消化性を減ぜるもの氷及雪水も亦其凝結の際に鹽分の多量を脱し空氣も離散し居れば蒸溜水と同じことゝなり

吾々の日用使用する所の玉川上水の水源は健康水なる

も其貯水池又は樋管を流通する間に種々の物質を混じ或は有機物を發生することあれば飲用の際相當の手續（濾過は勿論藥を入る、等）をせぬと不安心です

水中の有機物は空氣に曝露し又は煮沸し或は適宜木炭明礬濾過滿俺に其他收斂物によりて除くことが出來る

貯水池を造くるには板石を第一とし石、煉石灰、煉化石、瓦、鉛、亞鉛、陶、鐵、等あるも鉛製の水槽及導水管は水に鉛分を與ふる故之を用ゆるには保護藥を塗擦すべく鐵も亦酸化する故同じく内面に塗擦藥を用ふべし而して其池及水槽は可成蓋をなし通氣法を設け時に水草の生ずることあるも毒草ならねば强て取り除かざるもよし、それは水中の有機物を酸化し或は多量の酸素を吐き出すがらである。



濾水器は炭、砂、綿、等より出來てる簡便なるものがあるが時々交換なければならぬ最良のものは動物炭、植物炭、を一塊とし木炭を混ぜる微細の硅石及磁石鐵鑛、海綿鐵、酸化滿俺、海綿、羊毛、フラチル、妙石等を以て成る、シャムベラン氏の「ブシー」は完全なる濾水器なれども實用には供し難く、其他和英商會のパストール濾水器及岩本には甘利堂等より販賣する水濾器械が種々ある

水の悪しき爲めいろ／＼悪い病を發生すことがあるゆゑによく／＼注意せなければならぬ、今水の原因となりて發生る病を申せば消化不良、下痢、痢病瘴癘、氣熱、虎列刺、

其他傳染病、內臓蟲類其他の寄生物、疥癬の類又は鉛、水銀、砒石、銅、亞鉛、の中毒等である
炎陽三伏の今日此頃水の用心は勘要の第一なるべし

寄書百珍

家庭的避暑法

霜骨子

避暑の第一秘訣は暑しと思はざる事にあり其家庭的避暑法とは朝夙に床を出で冷水に顔を清め未た庭園除露滴々たるの頃暫く大弓を射塲に試み後園の垣根に吹き出でたる朝顔をながめながら朝餐を喫し食後信書の往復や其日到着の新聞雜誌に眼を洒し其務むべき職業に最も快活に從事し午后三時頃に至り苦熱甚だしく稍や其事務に倦むに至らば避暑的旅行記や其他の愛書を漁り六時前には妻に室內を清めさせ己は運動旁裸躰にて底園に水を撒き充分に掃除など爲し終りて入浴換衣清潔にして淡白なる田舍料理に一家團欒夕飯を食し後に一同表の涼み臺に登り和氣靄然の間に家庭的談話や其他無邪氣にして面白き世間話(尤も他人の悪口は眞平)に涼を待つ亦快ならずや
是れ吾最良の家庭的避暑法なり

神田　心身勞苦生

予は生活の爲め常に身心共に多忙にして曾つて一日として安居したる事なし、されば予の避暑法は一日の休暇を得て手足を延ばして小兒等と遊びたき事なり、此外に慾望なし、

北但　天涯一夫

夫れ居は心を移すと申しまして都會と村落とは實に其生活の度を異にします其家の樣子も大に異なります故

に其家庭避暑の方法も亦異らねばなりませぬ今玆に概畧を記して以て諸君の參考に供す
凡て居室は廣大なると狹隘なると完美なると粗造なるとを論ぜず清潔なるを可とす淸浄閑靜なる室卓上には花卉を挿み軒に靑簾を掲て朝に花を賞し夕に盆栽を愛づるなんど最も心地よからん朝は成るべく早く起きべし意氣の爽快なるのみならず心中自ら餘裕ありて事業も捗るものなり日中炎威赫々熱るが如き候は午睡すべし「昔宰予晝寢子曰朽木不可彫也糞土之牆不可塗也」と申され候へ共淸風徐に來りて涼しさ言はん方なき眞所を撰んで新聞雜誌など繙き何時しか華胥に遊ぶも亦一層の快味ならん乎、滋養の食物も度を過ぐれば必ず健康を害す二時には屹度起き上るべし起き上がれば直に井戸端に行きて手洗ひ口漱ぐべし元氣は出て丶暑さを夢中に過すの眞法なり、一家の老幼男女は此時に於て臺所に居並び瓜の漬物茄子の朝漬なんどにて澁茶を啜るべし四方山話に餘念なく稚兒など相手どるも興つきざらん、時には氷水冷飩饂などの如き涼しきもの細君の計にて持出すも面白し、夕景に至れば業を終り各自沐浴を了り輕裝漫歩して課業の勞を慰すべし食後は遣水に餘念なく庭上に散布すべし「椽側に出て丶蚊遣火の邊り團扇片手に一家の談話會を開くべし孫は笑ひ翁は愛て一家團欒の樂は亦其間に開かれん近所の人々も集ひ來りて談は亦一層の興味を添へん夏の日の暑も忘れて心地よきと得も言はれぬ域に達せん」明月皎々たる夜などは座を椽の一方に移して月を賞するも興あるとにこそ、要するに淸潔と早起、午睡と團欒は家庭避暑法の第一要義と信ず

備後　S　H　生

早起、淸潔、業務勉强、家内和樂、夕顔棚の下涼み、早寐、是ぞ家庭的避暑法の最上手段なり、

越後　上田幾雄

心の底より樂む完全なる樂は凡ての憂事を忘却するものである而して此の完全なる樂を得るには完全なる神に近くに由て滿足するものであつて是が家庭的避暑の最良方法であろふと考ゆれば私が平素の感を聊か申述ん

私は幸に赤貧中に生れたので（私は富めるものが清潔なる快樂を受くること難きは駱駝の針の穴を潜ぐるより尚ほ難きを信ずるものなれば赤貧が却て私の幸であります）孜々勉强して働かねばならぬ身分故早朝より起きて働きつゝをります此働きは神が私に命令し玉ふたるものなれば私は未だ神に見捨られざるとを喜びつゝ勞働していますから三伏の苦熱も遂に打忘れ今後も只管神の御眷護の下に働かんとを樂んでいます之れ私が避暑の一である

次に正午の休息二時間許りありまする故之も矢張り神樣がえ玉ひし時なれば成るべく無益に消費せざる樣にと思ふ機りから吾が愛するいつも柔順なる吾が妻は來りて吾が枕側に倚り學文の敎授を要求するので私は悅で其要求を容れ古今貞女の話や又は職業上の經驗等を話し倶に嬉しく語り終りに神に祈禱を擧げ亦も神の眷護の下に職業に從事するとを樂んで暮します之が私の避暑の一である

次に私共外工塲にて職業に從事しをります又妻は乳不足の爲最愛の子を乳母に托しをけば晝は思ふ樣に親子一所にをるとが出來ませんけれども吾が慈悲深き母上は屢々吾受持工塲へ吾子を抱きて遊びにまいります母上の心ろ配を思ひやり（子を思ふ親の心は千尋なる海の深さも物の數かは古歌）難有やら嬉しいやら終日喜びと幸ひとの中に勞働していますこれ私が避暑をなす樂みの一である

起居になりまするも私が監督の下にある徒弟と共に屋敷後なる大川に冷水浴をなし了りて爾後河上の清涼なる空氣を胎み徐ろに吹き來る風を迎ひつゝある吾書室に集へ來り徒弟等は謹愼に讀書するもあり昔噺をなすもありて時針九時を報ずるや一同は皆去て寢に就き翌朝亦た同一のことを繰返しつゝをるも神の眷顧と思へば最上なき樂みと暮していますこれが私の避暑の一である

要は只だ人の人たる道を踏み仰俯天地に恥ざる行をなして一家和樂の中に月日を送るなら私共の心は自ら清涼壮快となり人の苦む炎暑も忘却するに至ります

社告

次號第百八號の寄書百珍問題は左の如し

『健康策』

如何なる家、如何なる人にても日常[illegible]せらるゝ健康策あるべし

毎家には男子、女子、老人、小兒等各々實行せらるゝ健康策あるべし

健康策を學理的に講究するには他に道あり、されば茲に發表して世を益せんと欲するものは、諸君が實行せらるゝ健康策の方法と結果なり

博愛同情の諸君從來の如く陸續寄書の勞を執られん事を望む、此問題は世人を便益すること多からんと信じ、特に之を撰ぶ



社交一斑

流行の栞

流行子

靴

目今一般に流行する所の靴の種類は、第一露西亞革、第二深護謨靴、第三ズーク靴、第四護謨底沐操靴等にして、就中露西亞革を最上乘とし、深護謨靴、ズツク靴等順次之に次ぐ、今玆に流行の比較を示すときは、流行百に對して、露西亞革四十の需要、深護謨三十の需要、ズーク二十の需要、ゴム底十の需要を有する割合なり、露西亞靴の半靴にて價凡そ四圓五十錢位のもの最も使用多し、其外流行の上等靴には護謨革及アラメ革の如きもの、紳商社會に多く愛用さる、護謨革にて直段凡そ八圓、アラメ革にて凡そ九圓五十錢、次に又た流行の形をいへば、佛蘭西形といひて爪先(つまさき)の丸く緩やかなるもの一班に流行すれど、洋行歸りの人か洒落れた人々には、米利堅形といひて爪先(つまさき)の細く光りたるもの專ら穿用さる、尙ほ又た露西亞形といひて爪先(つまさき)の巾廣きもの、穿心地の宜しき爲めか、近來は頻りに使用者を增加せり、其他實用向最良の靴は、櫻組伊勢勝より作り出せる改良靴なりとす、こは工兵靴といふに似て外見を飾らず、實用一方のものにて、紐の編み上げ頗る簡易、價も廉なれば大に實務社會に喜ばれ、殊に學校生徒及び勞働者の間には、弗々此の靴の穿用を見受くるに至れり。

夏座蒲團

前號には革座蒲團を案内したれば今號には布帛(きれ)製のものを示さん。

◎大巾の紋絽製、巾一尺六寸位、色は金茶、白茶、水淺黄、鼠、價一枚三圓前後

◎同じく普通の小巾絽を二巾にせしもの、色は水淺黄、空色、淡鼠、價一枚二圓五十錢前後

◎上中社會を通じ一般の流行は白絹緞(しろけんどん)出來上り一尺五寸もの一枚二圓前後

◎同じく絹緞の地質薄きもの一巾半にて出來上り一尺六寸位、價一枚一圓五十錢位

以上は上等の綿二枚入れ仕立つる事と知るべし

獻上の丸夏帶

維新前後に流行せし男女の帶は男物にて筑前博多の紺茶の獻上又ば獨鈷に限り女物にて矢張筑前博多の茶、花色の片側獨鈷、片側獻上に限りしものなるが、明治十三年頃よりの流行は上州又は西陣製の本國錦（所謂繻珍）ほつ／＼行はれ始めたり而して同廿年頃より前記獻上博多は漸次姿をおさめ廿七八年頃に至りては女の帶と言へば繻珍に限れるやうの流行を來すと同時に、夫の獻上は全く用ゆるものなきまでになりしが、昨年頃より流行の風潮古代へ歸り、獻上、獨鈷(とつこ)の模樣は先づ男物より流行

し始め、今夏に至り女帯の流行模樣は花色地、お納戸地の獻上、獨鈷大に流行し來れり

絽紗絽の丸帶

遠く之を認めば絽紗のやうなれど手に取り見れば、絽を絽紗模樣に織り出せしものなり、地色はお納戸、花色最も多く、模樣の色は白茶を織出せしもの、價十二三圓

贅澤なる浴衣

先日歌舞伎座を見物せし折、贅澤なる浴衣を着たる一くみの姉妹を見たり、二人は茶屋にて晩景より着代しものなり、姉の方は絽幽禪にして、模樣は白地に淡お納戸と淡鼠とをもて、芒と螢と團扇とを大形に染め出せしもの、帶はお納戸丸龍の小柳繻子の片側に、淡鼠絽に松島の景を染め拔きし片側、帶上は絽縮緬の淡艸色の紅入模樣の大亂菊、算盤を取つて見れば三十五六圓の價あるべし

妹は絽縮緬の銀鼠を淡王子色の處々ぼかし拔きし內へ扇地形のつぎ合せ、其模樣ば富士と菖蒲を實物の色にてあらはせしもの、帶は緋の絽紗の金糸にて蓬萊山を織り出せし片側、鳩羽鼠の絽、大牡丹模樣、帶上は絽縮緬を桃色と紅に染め分け遠山霞の模樣あり、價は四十圓前後なるべし、贅澤なる扮裝といふべし

流行の夏襦袢

目下見受くる流行の夏襦袢は男物にて胴は白の手繰麻又は白の木綿縮、袖は白越後縮か明石縮、襟は勿論麻にて淺黃よりも白の方人氣多し、女物にて胴は白の木綿縮か白めれんす、袖は白無地又は淺黃又は桃色の絽、練絹、明石縮、半襟は言ふまでもなく絽縮緬

歌苑

松濤窟社中詠草

池袋清風評點

雨後櫻　尾崎宮一郎

むら雨のなごりの風に花あふち
露とみだれて散るが涼しさ

評　涼しき事は涼しき景情也されど知歌は實景を述るもの也彼小說家新体詩家などは全躰景情を精密に述るも多くは歐米文學に基きたれば四季景情の變化の景情の如き彼文學に粗なる點は矢張粗也況や我國の四季の景情は彼と同しからざるをやされば小說中などには夏といへば直に熱きものゝ如く述べたる

を見る然るに實際夏の熱きは之を初仲晩の三期にして其末期のみ仲夏梅霖晴るるまでは熱しともいはれざる也熱からざれば涼しからず初夏に早くも涼しなどいふは實景を見ざる也此詠も櫻は仲夏梅雨の候にさくものなれば打まかせて涼しともいはれぬやう也しかも實際身躰には未涼しからざるも打見たる景が涼しく感すればしかいふも妨なし

風前新竹　　市村高彦

さみだれのはれしゆふべの風にこそ
　うら若竹のそよぎそめけれ

評然り實景也古來實景に頓着せぬ詠多し今其一例を新竹に由て擧けんにはさきつ頃國民新聞に揭けたる中井關照子の詠に首夏雨といへる題にて

さら〳〵と竹の若葉にかゝれども
　まだしつかなる雨のおとかな

下半句は首夏にして宜しそは春雨固有の徃は小雨なれば今新に夏になれりとて其名殘もあるべければ也然るに上半に竹の若葉とあるは疑なき能はず竹は常盤木の松杉の如く四季葉の絕る事なけれど年々若葉も生ずべし而も古き葉との區別判然せず殊更に若葉と指示すべくもあらざる也春より首夏にかけて常に枯葉散り仲夏には古葉も新らしく見ゆれど首夏早々俄に若葉の目に立つ事はなきやう也然らば竹の若葉とは若竹の事ならん若竹は仲夏梅雨中に筍生長し晩夏舊六月始て若葉を出す故首夏迄は筍も未生ぜぬ種類多し或は筍の食用にて農家には人工にて春半に筍生長し首夏には若葉の生ずるものありとか若くは台灣を持出したらんには例外もあるべしされど此詠は普通の所也之に反して本詠は實景を見て梅雨中は筍生長して卷葉漸〳〵開くも質柔軟なるが上雨にぬれたれば風吹ても音たゝざる也梅雨新に霽れ葉乾き質稍固まりて風

吹けばそよ〱と涼しき音も聞ゆる也

鵜川　藤尾春江子

後の世のむくひも見ゆる篝火に
暗をたのみてさす鵜舟かな

評趣向は固より舊し唯用辭のと、のひたるを取るべし上句は釋教殺生戒に基きて即ち來世の罰は篝火の光にて見ゆると述べながら深き意は篝火の炎の中に地獄の火が聯想せらるゝも漁者は此世の慾の暗を一時の頼として殺生するは憫むべしとの義也鵜川は月夜には成らず常に暗をたよりにさすものなれば也

月前蚊遣火　市村高彦

夕風にかやりの烟うちなびき
月の影にはさはらさりけり

評赫灼たる晝間の炎熱漸く去り山村日暮れ嶺上清月を吐き茅店燻蚊の烟晩風に吹散らされ新涼言ふべからざるが如し

月前夕顔　磯貝由太郎

夕月の外には訪はん人もなし
あれし垣根のゆふがほの花

評故園荒籬月黄昏點々白花を現す清閑寂寥何人か懐舊の情を發せざらん

雨後夏月　堤鈺太郎

夕立のなごりすゞしき若竹の
葉末にのぼるなつの夜の月

評趣向は既に新ならざるも雨後の露は月の光にきら〱して涼しき實景見ゆ

月前納涼　京都第六後社某

水底にうつれる月は久かたの
空に見るより涼しかりけり

評何のむつかしき事もなし在の儘也初學殊に理屈をひねる癖ある人は斯る詠を主眼として暫く鍛錬す

べき也

山家夏泉　　　堤　鉦太郎

世にうとき山下庵の眞清水は
　夏をもよそにすめる也けり

評世にうときといひし故夏をもよそにといへり下句のすめるは直接に清水にかゝり間接には庵にもかゝれり是れ緣辭を上手に用ひたる也而も趣向既に舊し

閨夏月　　　藤尾春江子

蚊遣火の烟けきえし明方の
　つま戸もり來る月のさやけさ

評宵の間は凉しき月の光もひまなくくゆる烟にくもりがちなりしが曉夢新にさむれば枕上淸月の照らすあり一種の雅興生ず

夏泉　　　同人

ふきおろす峯の松風袖に入れて
　岩井の水を結びけるかな

評夏の景物は明白に擧けざるも風を袖に入れ水を結ぶとあればもとより炎夏なる事は知られたり亦凉しといへる詞も用ひずして凉しき景情は溢れてあり

海上曉　　　今治社中某

玉くしげふた名の島にゐる雲の
　しらむと見れば夜ぞ明けにける

評趣向に於ては何の取るべき所もなししかも辭調(しらべ)に於て高雅の感生じ淸美の實景吟下に現ず和歌は趣向よりも辭調を貴ぶとは此事也

折にふれたる　　　女弟四社某

故郷にかへるたび〲悲しきは
　おやの齡のつもる也けり

評此情は詠者よりも評者が深く經驗する所たりされ ばこそ二十五年前より旅に出でたる紀行詠の中に

[illegible]
ながき旅路の重荷なりけれ
とよみ又昨秋始て家に歸りて
たらちねの老たる見れば古里に
かへりし我も悲しかりけり
などよみつれ

苔上露　　北村ぬい子

萬代も經なむ巖の苔むしろ
はかなき露の玉ぞおきける

評題は珍らしくもあらねど此所に千萬年も動かぬ巖を出し之に最も脆弱瞬間なる露を對比せしは面白し

松下苔　　川本辰子

老松の木の下蔭の苔なれや
みどりの色の常盤なるらむ

評幽栖閑庭若くは深山の舊祠などに見る塵外の景也

交詢

◎第三十一問（芝田町齋藤君（一））犬、猫等の家畜の蚤、虱を除却せんには石炭酸六十倍水を注ぎかけて洗ひやるべし

◎第卅二問（深川宮澤君（一））淺蜊、蛤等尋常の料理以外何か面白き方法ありやの問、淺蜊は味噌汁、蛤は鍋に極つて居るやうなものゝ、自家にて種々工夫して新料理を發明するも庖厨の一興なるべし、記者の家にて近來實行する淺蜊、蛤の料理法は殼を去り一旦湯にてうでゝ水氣を去り、庖丁のムチにて能くたゝき、味をつけて玉子閉にするも可、葛粉閉にするも可、豆腐か卯の花（豆腐滓）を混じて少し甘味勝に煮る時は一寸變つた風味あり

◎第卅三問（麹町有樂君（一））婦人の夏繻絆袖の流行

は本號社交一班欄に詳記せり

◎第卅四問（靜岡三枝君）　夏季は食傷に罹る事は珍らしからず候、食傷する時は胃部に滯物あるを覺え嘔吐の氣ありて不快甚しく候かゝる時は指頭にて咽喉を搔ぐり十分嘔吐せ又灌腸して通利し、腹内を一掃する事肝要に候、食物は消化し易く柔軟なるを撰み、疼痛を感ずれば心下に温巴布を貼て靜に安臥し居るこそ得策に候へ

◎第卅五問（四谷たね子君）　くさやの干物とは、腐敗したる魚の臟腑に漬けたる鹽物にて、魚腸は蛆を生じ、鼻持のならぬほど惡臭きものなれば時節柄斯樣な食品は恐るべきものなり

◎第卅六問（岩代石渡君）　當今東京に流行する流派は遠州、千家、池の坊に候が遠州千家は其術自然なるが故に尊重せられ候

◎第卅七問（神田みね君）　捨小舟といふ漬物は白瓜を二つに割り、中實を取り鹽をもりて日に乾しあげ、其れをこぼさず、からびたるとき壺などへ貯ふ、其形小舟に似たるより名づけしものならんか

◎第卅八問（同君）　茄子飯の製法は性よき茄子を炭火にて燒き水に入れて其皮を剝ぎ去り、細に裂きてよき程に碗に入れ、其上へ飯を盛り清汁に胡椒などの香料を添えて出す

◎第卅九問（神奈川縣日君）　小兒學校へ行くまでの養成法は素より家庭敎育の肝要なる處に有之一々說述せば長々しく相成り、此事は每に我家庭雜誌にて其方法等記載致候要するに學齡までの小兒敎育は成るべく自然の法則に從ひ十分身躰を運動遊戲せしむると同時に自由に其意思をも發暢せしむべき事母親の務にて候必らず學問攻の弊に陷り小兒の成長を妨ぐる事なきやう御注意專一に候

◎第四十問（同君）　胎兒の長徑の概畧を知るには

妊娠の月數を次乘するにありて例へば三ヶ月なれば3×39九「センチメートル」この法を以て五ヶ月までは知るを得るも六ヶ月にては三十二「センチメートル」となるこれよりは前月の長さに四乃至五を加へば可なり即ち七ヶ月には三十七、八ヶ月にては四十二、九ヶ月にては四十七、十ヶ月にては五十一「センチメートル」なり

小兒娩後は身の丈けは大人の三、五分の一に居る第一年中は二十「センチメートル」第二年中は十「センチメートル」第三年中は七 センチメートル」增加し第五年より十六年の間は每年五、五「センチメートル」つゝ增加第二十年に達すればみのその成長甚だ少なく五十年後は推間軟骨の扁平となるにより身の丈けを減し八十年に至れば六乃至七「センチメートル」退縮す吾人青年にても朝夕その身長を異にするなりこれ夜分横になりて居る時は推間軟骨は充分延びて居るも終日勞働躰重を支へるときは壓迫さる故にその身の丈けを異になすなり

躰重は分娩後は大人の二十分の一に居り第一年中三倍となり男子は四十年に致て最高に達し六十年より減少し八十年に至れば六「キログラム」減少す

◎第四十一問(同君へ)　酷熱の時眩暈胸部くるしみ皮膚は灼熱し顏面は紅色を呈し舌乾燥し脉膊はやく呼吸をそくなる而る時は究屈なる衣服を脫がしめ能く空氣にふれしめ水を飮ましむべし次に鬱蒼たる樹陰或は家屋の淸麗なる塲處に移し頭を高くし後ろに倚らしめて半坐の位置に伏れしめ新鮮の空氣を與へ多量の水を注ぎかけ冷水に浸せる布片を以て頭部及胸部を冷却せしめ水をのましめもし呼吸絕止するときは手足を摩控し葡萄酒を與へよ尤もその時は醫師を迎へ治療を乞はざれば心臟及肺臟の痲痺を起して大害を來すことあり

◎第四十二問(福島愛水君へ)　名勝案內は博文館發

行野崎左文氏著の『日本名勝地誌』簡にして要を盡せり定價一冊三十錢

◎第四十三問（大磯貝壁君へ）　葡萄酒は舶來の生葡萄酒に限る、近來種々の名を附して賣り出せし香竄葡萄酒は粗末なる原料を用ひ惡種の砂糖にて甘味をつけあるもの多し、能々吟味せざれば飲用して何にも役に立たぬなり

◎第四十四問（兵庫恭子君へ）　東京にて内職の數多けれど、地方へ出入するは甚だ面倒を重ぬるがゆゑ、大低の商家に就き聞き合はすもいづれも其の趣を答えぬ、矢張其他に於て内職に從事あるかた然るべし遠地は運賃加り注文の次第も直接ならざれば萬事に不便多し、尤も新聞にて何々の内職ありなど、大袈裟に廣告するもあれど、猥に信ずべからず

◎第四十五問（多血生へ）　別に色を白くなすと云ふ藥劑なし併し褐色々藥を多少減せしむるに微温湯にて上等の石鹼を用ひ能く洗ひ乾きたるとき手拭にて皮膚を強く拭ひ血灌の循環をよくせばかなり叉ソパカスをとるには大豆小豆を細末にし之れにて洗ふときはその効能を見るべし

◎第四十六問（ＳＨ生へ）　婦人懷妊中の食物は本誌第九十六號家政の欄を一覽あるべし

◎第四十七問（但馬鈴木つね子君へ）　身躰肥滿につきては本號家政欄を見らるべし

◎第四十八問（小石川臙田八重子君へ）　男女の性により躰温に影響を及ぼすことなし有力の多血家に貧血家より躰温比較度高きものなり食後に躰温二三分上昇すこれ新陳代謝活潑なればなり飢餓の時はやゝ低きにて明かならん

躰温は年齡により差あり初生兒は三十七度四十五なり五年乃至九年は三十七度七十二なり十五年乃至廿年は三十七度三十七なり廿一年乃至廿五年は三十七度廿二

なり廿五年至至卅年は三十六度九十一なり卅一年乃至四十年三十七度一なり八十年は三十七度四十六なり躰温は時刻によりても差あり「ベーレンスプルング」氏の實撿によれば午前六時には廿六度六十八正午卅六度八十七夜の三時頃は三十六度三十その他生理學者の研究によるも多少の差あり併し一人一日中の平均温は「イエーゲル」氏は三十七度一三なりとす

◎第四十九問(牛込K K生(　)　西洋人は齒を貴重するが故に日本人の如く氷をガリ〳〵嚙むことなく氷片を水に和して飲用とす、鉋にかけて食する事は日本の新發明にして西洋人も日本人の齒力の鋭利否な齒を粗末にするには一驚を喫し居れり

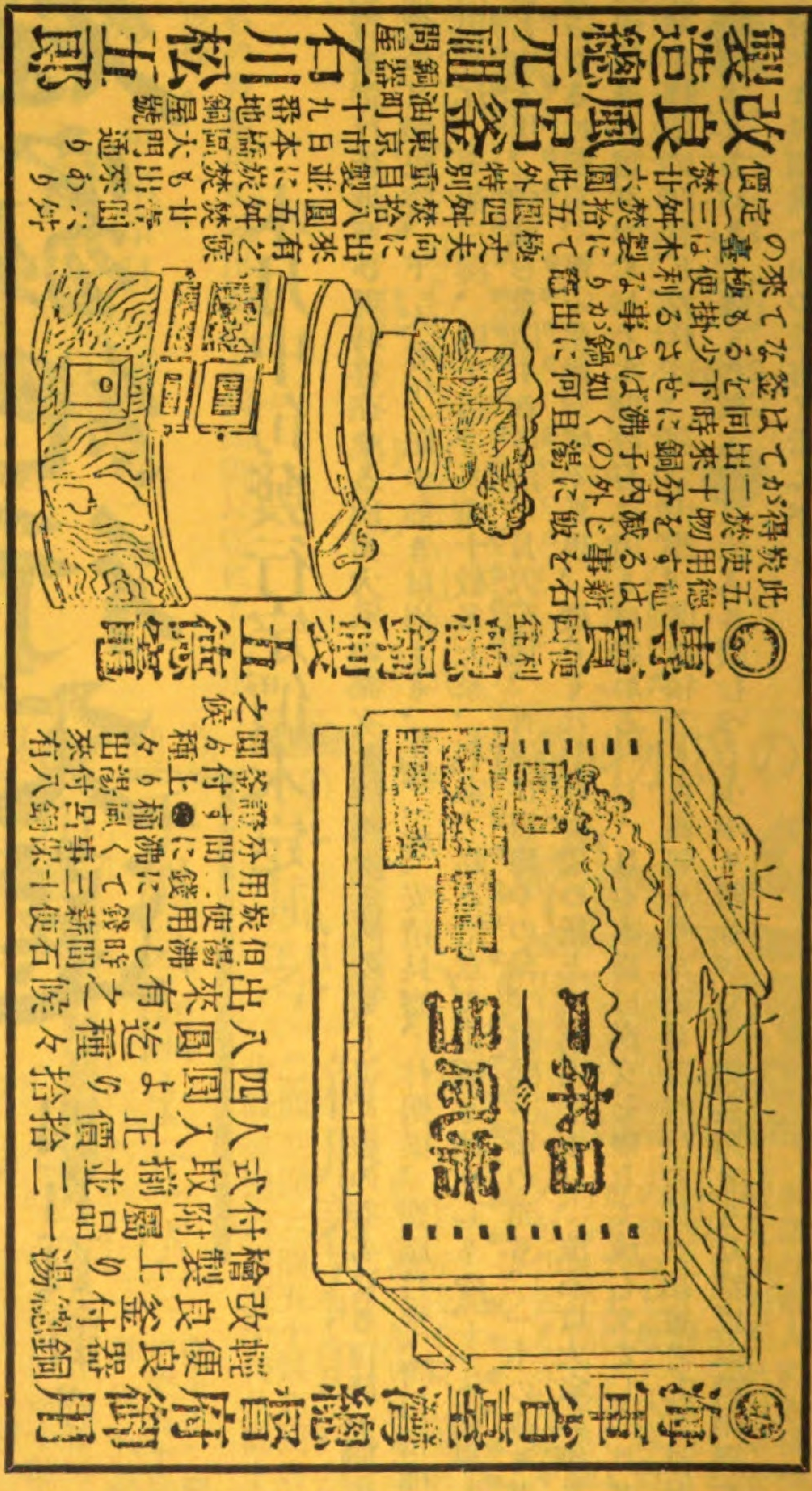
◎第五十問(紀伊山崎君(　)　分娩の日を知るは最後の月經日より三ヶ月を減し之に七より三ヶ月減すれば五月なりこれに七日を加ふ十二日となる即ち分娩の日は五月十二日なりこれを知れば他も推して知るべし

社告

主筆德富猪一郎歸朝と共に大改良實行準備の爲め來る八月廿五日發行の分を休刊し第百八號は九月十五日發行す、如何なる新面目を以て諸君に見ゆるかは改良新刷に徵せらるべし

五德竈の巧妙便利にして最も徳用なるとは本誌前號即ち家庭雜誌第百六號家政欄内に臺所道具として批評せられしが如し

五德竈といひ据風呂といひ手間と薪炭とを要すること共に從來の半分にて足る



据風呂の簡易便益にして最も良器なるとは海軍省及び臺灣總督府の御用を蒙りたるを以ても證すべきなり

大方の諸君子何卒御試川の上陸續御購求被下度奉希上候

名家紀行文選

四百頁許り

本月中旬發行定價未定

名家紀行文選は近世及び現時存在せる漢文大家の記文を輯集せるものにして、彼の有名なる山陽の耶馬溪 拙堂の月瀬紀勝、下木曾川記の如きは固より、佐藤一齋、安積艮齋、林鶴梁、齋藤竹堂、野田笛浦、乃至川田甕江、菊池三溪、岡千仭、其他十數名大家、名家、銘々得意の手腕を揮ひしもの、一々網羅したれば名山大川、神藏し鬼匿するの地、月天花地、香濕ひ露輝くの景、其他一石の奇も、一木の異も其態を盡さざるは無く、筆々生動、字々活現、疑らくは是れ雲煙の紙上に湧出するを、流石は大家の筆なり。三伏消暑の讀み本として本書の右に出るは無かるべし。且つ本書は漢文を變じて流し文とし、且其順序排列の躰裁に注意したれば、尋常中學、師範校若くは高等小學卒業前後學生の作文用書としては是上なき好讀本なるべし。要するに本書は大人も讀むべく少年も讀むべく、銷夏用ともなれば教科用書とも成り得べき無類誂へ向の珍書と云ふべし

發行所

東京市京橋區日吉町

民友社

發行回數及發行日改正

大改良
來る九月以降

紙數現今の約三倍

國民之友
毎月一回十日發行

定價一冊十五錢郵稅一錢五厘

英文
極東
毎月廿日發行

紙數紙質大改良

定價二十五錢郵稅二錢

家庭雜誌
毎月一回十五日發行

定價一冊拾錢郵稅一錢

頁數大增加。定價改正

發行所 民友社・家庭雜誌社 東京市日吉町

家庭雜誌第百七號附錄

（明治三十年八月十日發兌）

文藝

可憐兒　湖處子

お母さん死んぢや嫌だ、嫌だ〳〵、お母ちやん死ぬなら坊も一處に死ぬ、お母ちやん死なゝいでいてお呉れよ、お父ちやんお母ちやん死なゝい樣にしてお呉れよう、と病躰にとりつき、縋りついて泣喚く、我子の手をおつと握りしめ、眠れる眼を力なげに刮ちきて、おゝ坊やか、好愛や……死ともない、貞臓殿どうぞこの子を可愛がつて、といふ

聲も苦しき息の下より、次第に細りゆく臨終のきは。良人貞藏は何といつた、胸もつまつて、おゝ宜だ死ともあるまい、まだ西も東も知らぬ稚兒を後に殘して逝くのは嘸辛からふ、心も殘らふが、これも定業なりや詮方がない。年藏は己れが知つてる、己れがよう可愛がつて、行末は必ず成人させる程に、安心して成佛して呉れ。坊ももう泣くな、これからはお父さんと一處に寐るんだよ。いゝかい、面白い噺もたんと聽かしてやる、欲しいものもたんと購つてやる。泣くな〳〵いゝ子だと、泣子を膝に抱きあげて、涙ながらに慰めた言葉、よもやまだ忘れはしまいに、何たる情ないとであらう、四十九日の法會を濟して、まだ程もないに、いかに性根が腐ればとて、素性も知れぬ女を連こんで、朝夕佛の手前も恥ぢぬ遊興三昧、人もあらうに、何處の馬の骨ともわからぬ、茶屋女づれが色香に溺れ、庚申樣かなんぞの樣に、棚の上に崇めまつりて、水も己がくむ、拭掃除も己がする、かれもこれもと地にもつけぬ程のいたはり樣、一寸優しい言葉をかけてさへ、女は直につけあがる。況して根が劣等い生れに持前の我儘は益々增長する。やがては夫を尻に敷いて、やれ帶を買つて呉の、やれ羽織が欲しいの、芝居が見たいの、花見に行きたいのと、女の欲には限りがなく、分際に過た注文をいろ〳〵と並べたてる。それを嫌とは云へぬ貞藏、オイ〳〵と返事の內より、出來得るかぎりは何でも買つて遣る、家政は段々荒むで來る、可愛そうなは年藏で、天にも地にもたつた一人、年藏や〳〵と、

慌を慰さず可愛がつて下されし生の母には先だゝれ、たのみと思ひし父の心は、からりと掌を翻すが如く變りて、以前の樣にちやほやといたはつては呉れず、繼しき母からは、朝夕牛馬の樣に追ひたてられ、小さき手に自分の背よりも高い帚木、自分の身体より重い手桶を持せられ、まだ仕もなれぬとを、ガミ〳〵といひつけらるゝ其境涯の痛々しさ、泣いても小言、笑つても小言に、三度の食事など滿腹食つた事なく、飯を盛うにも、呵られはせぬかとぢつと母の顔を見る、あゝこれが腕白さかりの兒童がなすべき擧動か。

夜は暗黑な室の中に、唯獨り寐せられて、煎餅浦團は引破ぶれど、寂しさに目も合はず、枕もとをスル〳〵と駈けぬける鼠にも、小さき膽を冷やし、犬の長鳴を聞くまでも寐つかれず、まだ寐さかりの年頃なるに、頭は冴へて、お母さんさへ生てゐて呉れたら、こんな晩には、桃太郎の鬼退治や、かち〳〵山の面白い寐物がたりを聞ふものをと、彼を思ひ此を思ひて、昔しの母が戀しく、今の母がつれなく、變つた父が恨めしく、夜を泣き通すこともある。

獨樂を强請り、紙鳶をせびるより外には、何の苦勞も知らぬ、若竹のすなほなりし心も、無殘なる雪や嵐の障より、いぢけもすれば癖もし、人に優しき言葉をかけられても、返答はせずに、小供らしくもなき面相をして、ぢつと對手の顔をながむる僻、いつとなくつくを、面憎しとこそは思へ、不憫と思ふ人はない、况して繼母は年歳が、此頃時々己

の吩咐をきかず、剛情を張るのに、憎さ彌增して、前よりも一層殘酷く逆待ふを、折々は傍に見兼ねて、おい〳〵大概にして止してくれ、水を汲めなら己れが汲ふ、米を磨げなら己れが磨ふ、あんまり擲て、傷でも負せるとよくないから、とさすかは血を分ちし父貞藏、止めないとはなけれど、お前さんは控ておいでなさいよ、なあにこの穀潰奴、打殺したつて足りやしない、お前さんがそんなといふから、益々つけあがつて、我儘をはるではありませんかと、二言めには云ひ込められて、オイ〳〵と云ひつゝ手を引く意氣地なさ、一向に賴もしくない。

年藏はかくきびしく折檻のみされては一刻も堪らず、忍びやかに家をぬけ出で、外に行くところもなければ、七八町ばかり山手にあたる、戀しき母の墓場にいつて、生え蔓りたる雜草を拔きとり、道々手折つて來た草花などを手向け、呵らるゝとは知りながら、母がこひしく、家に歸るのが辛さに、一日墓石と遊んで來ることもある。

年藏がかく憂月日を送る間、貞藏夫婦は益々娯樂に耽けりゆき、身の程知らぬ奢侈贅澤を極むるに、坐して食へば山も空しく、遊んで暮すに千兩箱の百あつたとて足らう筈なく、先代の父が肝血を絞つて、やつとのとで積みあげた蟻垤ほどの財產も、日に照さるゝ雪達磨の樣に、片端より溶けて泡と消え、美事に築きあげたは借金の山、諸方に不義理を重ね、村中のものよりは譴責をうけ、はや身動も出來ぬ仕儀となつた。

今日は鎮守の御祭り、腹一杯の歡樂を盡しくれんと、村中のものは秋の收穫を終へてより、今日のこの日を心待に待ちしとて、早四五日前より、目覺しき趣向もがなと、上の組、中の組、下の組、それ〴〵の若者連が、負じ魂の肝入空しからず、茶番もあれば、俄躍もある、狂言もあれば、山車もある、わい〳〵の聲、神樂太鼓、馬鹿囃の音と雜はりて、朝からの大賑ひ、年藏は心も心でなく、面白くもない內にうろ〳〵と起たり居たり、斯う云ふ時には殊更に死んだ母が戀しく、お母さんさへ活きていて吳れたらばと、思へば悲しくもなり、しよんぼりと門口に佇立んで、戶外の方をながめて居る耳もとに、年藏と父の呼聲が聞ゆる、何事であらうと駈け付けて見れば、今日の祭にお前もさぞ往て見たからう、今日は一日隙をやるから、たんと遊んで來な、着物もそれでは見つともないから、これと着代へて行けとて、簞笥の底から餘處行の袷を取り出して、手づから着代へさせ、一寸その風つきを見て思はず苦笑し、ハ、、、餘程短かい樣だな、それもその筈だ、お母さんが死ぬ少し前に、お前に縫てやつたんだから、これでも長いよりもいゝや、さあ早くいつて來いと、何時になき父の優しき言葉に、年藏が喜は譬へん方なく、アイと返事も勇ましく駈け出すを、待て〳〵と呼びとめ、これは小使だ、何なりと好なものを買て食へと、五錢銀貨一つ投げてやれば、年藏は天にも登る心地、直ちにそれを攫んで飛んで行く、跡を見送つて、貞藏はら〳〵と淚を流したが、今まで默つ

て傍にひかへて居た妻は、之を流眄にみて鼻の先で笑つた。

年歳は見るべきものを殆んど見盡し、萎れ方にやう〳〵歸つて來て見れば、訝かしや戸が鎖してある、如何したとかど思ひ、父ちやんと一聲高くよんだが、答がない、父ちやんと更に高く二聲呼んだ、同じく應がない、三聲呼んでも同じくだ。詮方がないから裏に廻つて見れば、勝手口の戸は開いて居るので、そこより中にはいつてみれば、誰も居ない、鬼の居ないうちに洗濯をきめていた鼠軍、人影を見るより、周章てゝ潰亂してしまつた、さてはと覺つた年歳、ワツトばかりに泣き出した。

生の母には死別れ、現在の父には置き去りにせられ、歸らんに家はなく、身を寄せんにも親緣はなく、捨られものとなつた年歳、今夜は何處に寐たらよからう、明日は何を食つたらよからう、行末は如何なるとかど思へば、心細くもあり恐ろしくもあり、情なくもある。されど小さき胸には何の思案も出でず、唯ぶら〳〵と裏道より田圃傳ひに、あてどもなく漂ひ出でた。

寂しき田のもの、此處彼處に刈り殘され、雨露に憔悴果て、見る影もない姿となつて、空しく立て居るのを見れば、我身と引くらべて、悲しくも懷かしくも思ふ案山子の、破笠に力なき光を投げていく夕日も、早や山に隱れた、後の方よりは祭の喧擾が、手に取る樣に聞え、前の方よりは入相の鐘が哀れに響く。烏は三三五五連れだちて栖に急ぐ。

自分は伴もなく、行く處もなく、羨まし相にその後を見送れば、早や宵の明星が、山の上に瞬いて居る。あたりは追々暗くなる、もしこの時月が出なかつたら、どんなに寂しい事であらふ。

年藏はぶら〳〵と、足のむくかたをあてどなし、行くともなく行くほどに、いつしかだら〳〵登りの山路に差しかゝつた。何の爲に、また何時の間に、こんな處へ來たのか。自分ながらさつぱり解らぬ。年藏は足を止めた、これより進めば、唯山深く分け入るばかり、どんな恐い目に遇も知れず、さらばとて引返しても行く處はなし、身體は疲れる腹は空る、進退は極まる、夜は深る、つく〲死んだ母が戀しくなる、戀しくなればそこに行きたくなる、否そこより外には行きところはないのだ。

足もとには、巖に激し、石を突き、月影を微塵に碎いて、溪流が湧て居る。年藏はこの川に身を投げて、死んで仕舞ふと決心した。既に飛び込うと身を機ました一刹那、大きな毛だらけの腕が後からグワシリと抱きとめた。愕然して振り顧けば、顏赭く口髭のもぢや〳〵と、見るから怖ろしい仁王の樣な男である。年藏はこれ必定追剝山賊の輩と思へば、魂も身に添はず、びく〳〵と慄へて居ると、大の男は頭から酒臭ひ息を吹掛け、おい小僧、手前なんで死ぬのだ。まだ年もゆかないで、死うと迄思ひ込むからは、理由があるに違えあるめえ。蘊まずぬかせ、そんなにビク〳〵とするとはねえ。風貌こそこ

んなだが、盜賊でも惡黨でもありやしねえぞ、日陰ぼっちの鼹鼠の樣に、太陽樣の顏見て逃げる樣な陰臭へ男と思ふな。これでも立派な人間樣だ。善くはするとも惡くはしねえ、さあ云ひねえと、荒き言葉の中にも、眞實がこもつて居るので、年藏逆はず柔順に、お父さんが己を打捨つて逃げて行つたんだ、だから行き處がないから……と、云終らぬ先にワッと泣出した。なにお父さんが手前を置去りにした、畜生、憎い奴の人でなしめ。どうして吳りよう、おゝ可愛そうに泣くな泣くなと、父を怒り子を憫み、これからは手前のお父さんに己がなるんだ、さあこい、やつてこらさと、年藏を輕げには背負へと、醉ひたる足もと覺束なく、山路を登つていつた。この男はこゝより一里足らずの山の半服にある、戸數十軒ばかりの村に住んで居る、名を平作といつて、村中もてあましの大酒漢なれど、それを苦にやむ兩親もなく、兄弟もなく、妻がなければ子のあらふ筈なく、天上天下唯我獨りぼつちの身は安く、毎日この山を下つて、町の方に勞働に出かけるが、歸りには必ず醉つて來る。あれ〳〵また平作が醉ばらつて居る、あの足を見ろ、宛然歩みならひの小供の樣だ、あれで如何して狹い山道が行けるもんか、必定路を踏み外して、ところ〳〵と谷の中に轉げ込むに違ひない、と往々町のものに危ぶまれるが、翌朝は相も變らずやつて來て、相も變らず醉つて歸る。或時は足腰も起たぬ程泥醉し、人の軒下をもかまはず、晴天に鼾の雷をころがすともあるが、さればとて兎や角と干渉するものも

ない。それはもし氣障なことをして、怒らせる事などがあつては、どんな亂暴を働くかも
知れぬぞ、内々恐れを抱いて居るからである。かく平作に酔ふときはよく酔ふが、働くときは殆んど別種の人間と思はるゝ程で、普通人の三人分も四人分も獨りでする、從つて賃金も人よりは餘程餘計に取るから、かく酒は呑んでも、はたのものに迷惑をかける様なことはない。

茨にも露、鬼の様な平作にも優しき心はありて、年藏を連れ歸つてより、小僧〳〵と痛はり、晩の歸りにはどんなに醉つた時でも、土産を買つて來ることを忘れない。これを母が見ているなら、草葉の陰で、手を合せて居るであらう。

年こそゆかぬが、憂い目辛い目は充分嘗めた年藏、他の小供とは異なり、人の情を胸に刻むとは一段深く、初はヂカ〳〵と、毛氈の様な平作が膚に抱かれ、熟柿くさい息を吹きかけらるゝのが、辛かつたが、今は其が嬉しくなり叔父さん〳〵と呼んでいたのも、次第になづみて、今はお父さんお父さんと慕ふ様になれば、平作も小僧〳〵と、可愛さは彌増して、歸りついてもみたい程である、お父さん、己れも一處に行き度いと、朝出掛の父が裾をとつて、獨り殘るが寂しさに、少しは甘へたる調子で云ひ出す時もあるが、なあに貴様が行く様な處ぢやねえ、留守番していろ、留守番していろ、其代り今日も好いもの買つて來てやるぞと、云ひ捨てゝ往くのが常である。

露は霜、霜は氷と、山里は冬の至ること早く、追々寒空となつて來れば、お父さんが無寒からうと、木枯の風びう〳〵と吹きすさぶ後の山に登つて、枯木を拾ひ、火を焼き、湯を沸かして待つて居る。

ある夜の咄もの語に、お父さん酒を呑まないといゝがなと云ふ、なぜだと問へば、だつてお父さんが餘り醉ばらつて、轉んで負傷しはしないかと思つて。平作は呵々〳〵と笑つて、馬鹿奴よい〳〵老爺ぢやあるめえし、高が二三升の端下酒に、へこたれる樣な平作ぢやねえぞ、酒は百藥の長といつて、之が有りやこそ働けるんだ、これを止されておたまり小法師があるものか、と更にとり合はぬ。

今日は朝より雪もよひの空寒く、ざつと吹きおろす高峰颪、木の葉をも盡し、山を全裸躰になしても飽き足らぬのか、朝戶出の衣も剝がんばかりに吹きまくる。オ、寒いわ寒いわ、今日は雪だなと、云ひ〳〵平作は出ていつた。午頃になつて嵐は息んで、少し暖味を感ずると思ふと、さあ降り出した。雪だ雪だ大雪だ、山も林も森も家も、何がなにやら、暫しは天地冥濛であつたが、少し小降りになつて、戶外の方をながむれば、枯木の林も、常盤の森も、近い峯も遠い山も、一切無差別の銀世界。今日はお父さんが無困つて居るであらふ、と思ひ煩ふうち、冬の日足短かく、さら〳〵と夕鴉の栖の雪を拂ふ音も聞えて、早暮近くなつた。もうお父さんが歸るに程もないからと、年歳は一人爐

の前に蹲踞いて、柴折り燒べて、雜炊を煮、茶を沸かす内に、日はとつぷりと暮るゝ。

平作は歸つて來ぬ、さわ心配でならぬ、一度も二度も三度も四度も、もう歸つて來さうなものと、門口に出て見れど、その樣子もみえぬ。もしやお父さんはこの寒い雪の中に、醉い倒れては居るまいか、そう〱、必定それに違ひないと、小さき胸に思ひつめた年藏、左右の思案もなく、跣足のまゝ、一目散に家をかけ出した。

間もなく平作は歸つて來た、おい小僧〱今歸つたぞと、大きな聲を出さぬでも、足音ばかりで飛んで來る年藏が、何うしたのか返事もせぬ、もう遲いから寐たのかと、ヅカ〱と内にはいつてみれば、茶が獨で沸いて居るが、年藏は見えない。小僧〱と二聲三聲呼んでみたが、更に答がないので、平作が心はやゝ波立つて來た、何處ぞへいつたのかと、再び戸外へ出てみれば、歸る時までは氣付かなかつたが、今見れば雪の上に小さい足痕がついて居る、はてなと何處に行つたらうと思ふ平作、益々心隱かならず、その足痕を拾つて、一町行き二町行き三町行つた、遂に片側は堤片側は低い田になつてゐる、狹い畔道の半で、その足痕が斷えて居る。平作は足を止めて、あたりを見わたせば、その田の中に、黑いものが横はつて居る。雪あかりにすかしてよく〱見れば、誰あらふ年藏だ。平作は直ちに飛び込み、年藏を抱きあげて見れば、早や手も足も冷へきつて、僅かに息の根が通つて居るばかりである。平作は氣も顚倒、心は狂せんばかりのわはて

かた、年歳を背負つて雪の上を飛ぶ様に家に歸つて、年歳が父の爲にとて用意してゐた枯柴にて、年歳を温めて介抱すれば、やう／＼にして活き復つた年歳、平作が顔をみて、お父ちやん歸つたかといふ。平作は歸つて來たもねえもんだ。貴様一躰何したあんだ處へいつたんだ、貴様が馬鹿な眞似したばかりで、己はどんなに心配したか知れねえぞ、とひどい小言、己はお父さんを迎ひにいつたんだ、いくら待つても／＼も、お父さんが歸らないから、何うしたのかと心配して迎ひにいつたんだ。

この一言に、平作はいかに感激したのか、大きな眼に涙をうかめた。

なに貴様が己を迎ひにいつたと、己を、畜生ッ有難え、それほどまでに貴様は己を思つて呉れるか、それとは知らねえで、呵つたのは己が悪かつた、許してくれ。實はなあ、一升ばかり引かけて、好い心持で歸る道中、足を踏み外し、谷底に轉げ落て死損なつたい。幸ひと雪の上で、負傷一つしなかつたが、お考へて見ると、酒飲の生涯は綱渡りだ。又何時落ちて死ぬかも知んねえ。乃公が最期は自得でも、罪のない貴様にまで、今夜の様な憂目をみするだ、止した止した止した、きつぱりと酒は廢止だ。

貴様といふ可愛いやつさへありやあ、なあ小僧、酒もなにもいつたもんぢやねえ。

これより後平作は、年歳がさゝぐる萬斛の愛を、一斗の酒に代へて、骨身を吝まず働けば、二人暮しに有餘る程金はとれる。餘つた金は月に年に積りて、數年の後には有福な

身となるとは、今より見え透いて居るが、それにしてもかの貞藏夫婦は、如何して暮して居るとであらふ、知らまほしきは其行末である。





十一の鶴

稻澤英子

此處から遠くもない處に燕の住で居る暖い國があります、其處に大層金持の王樣がありました、其御方に十一人の宮樣と末に保宮と申して唯一人の姫宮樣がおわして、皆々大層可愛がつて敎育になりました、兄の宮樣方が學校に御出になる時、胸にはきら〳〵光る勳章を幾個ともなくお懸けになり、腰にはいかめしく、黃金作の劍をつけて、又使用の石盤は瓦の代りに金剛石でつくり石筆は黃金であつたそうです、又お姫樣には繪の手本を下さいましたが其は大した價ある物で何十萬とのいふ數も分らぬ程高いものでありました、なぜそのよふに高いかと申しますと、此の中に畵いてある繪は御姫樣が御寫しにならふとすると、獨りで動きだすやうに出來て居たからです、あなたがたは之をお聞きなされて嘸宮樣方は幸福な事とお羨みになりましよふが、どうしてそうではございませんでした、其は母宮樣が繼母でありまして宮樣方が「まゝごと」をして遊びたいとき菓子を

おねだりなさると其代りに沙を下さるやふなことが度々ありました、其故父の王樣が何程お可愛がりになつても、母宮樣が邪慳になさいますから宮樣達はいつも大さう御心配

母宮樣の邪慳な心は次第に募つて參り、後には宮樣方を邪魔にして、姫宮の方は仕付のためだといつて、侍女に申つけ此處から遠い田舍の百姓家に預けになりました、又十一人の宮樣達には鶴になつて何處へでもいつてしまつたがよいとおッしやつて多くの巫女を召寄になり色々と其不思議な術を施させになりました、するとふしぎや其明る日からは其通りに成り十一人の宮樣方は何處へお出になりましたか、王城の中には見えなくなりました。

其後七八年の間と云ふものは何も知れずに過ぎましたが、或年の秋のことでした、宮中に文武の百官を招き盛なる酒宴を開き、此の宴すみました後、王樣は色々と昔の事を思ひ出し切りにお子樣方を御覽になりたいとお思ひになりました、併し十一人の宮樣達は何處へお出になりましたか少しもお出先がわかりませんが、保宮丈はお出の所も明かつて居りますから、翌朝王樣は母宮樣と相談になつて直ぐに一人の使者を仕立になり取戻しになりましたが、使者は此保宮を先づ母宮樣へお連れ申しました、母宮樣は此を御覽になり大層しばらくだつたが大きくもなり、おとなしくもなつたなどといろ〳〵のお悅びの話がありましたが實の處御心の中では、この宮を一通りならず憎む心がもえ出した

のであります、なぜと申しますといくら山の中の百姓家で育ちになつても備はる容姿は美しく行儀作法は何所から見てもしとやかで高貴な出生と見えます、そこで母宮樣は父の王樣に御目通りいたす前に何か巧みをなさいました、一番お氣に入りの女中に申付になり保宮を裏の池へ連れて能く洗つて、そして、保宮が池の中へはいつたら、すぐ河童を呼べさうすると、河童にはゝや先程巫女達に言ひつけて、頭の者は保宮を愚ものにし、顏へ上つたものは不器量にし胸の者は惡人にいたすやう魔術を施させてあると仰せられました、女官は之を承り其通りしたが宮樣の御姿はお變りなさらぬ却つて保宮の信心深い潔白な心に河童はおどろき何一つもせず其心に化せられいつの間にか三つの赤い花が池の水面にうかび上つた、女官はあきれてしばし此の有樣をながめたが直樣この狀を一々母宮樣へ奏上げた、母宮樣は其では仕方がないと、此度は外の事を考へつき、胡桃の皮を絞り此の汁で保宮の玉顏を洗はせた處が、今までの美しい立派な顏はトント失せて、おそろしいといはふか、怖しいといはふか、ひどい顏となつた、宮樣は鏡でうつしたら、自分でも吃驚されたが、母宮樣の仰せですから背くとも出來ず、其まゝ父の王樣に御目見えなさると、父の王樣は一方ならずお悦と思ひの外、却つてお怒りになり、此の樣なものは、一時でも此の城内にをく事はならぬと仰せられ、可愛想にも勘當になりました、保宮は今は父王にも母王にも見離されたれば、此度は十一人の兄宮達にお目にかゝりた

いと大層に慕つて、何處とも知れず足にまかせて歩みだしになつたが、丁度山の奥へ奥へと入り込み隨分勞れになつて其處へドットお倒れになりました、するとトウ〳〵と水の流れる音が聞えます喉がかわきになつてたまりませんから、今はやうやくに其身を起し水のありかをさがし廻りなされまして、遂に小さい泉から細い流れが湧き出でゝおりますのを、見付だしになつた、山の中の清水のことですから、大層澄でいまして其の水面は鏡のやうでありました、宮樣は悅のあまり兩手で水を汲んで二三度サモおいしそうに召し上つて後で顔を洗ふと不思議や今までくッついて居た澁皮は、全然奇麗にはがれた、そこで、大層悅んで疲も忘れ又も精を出してズン〳〵と進みになつた、其時向ふの方から白髮の腰は梓弓の婆さんが、片手に杖、片手に籠をさげて來たのに出逢した、宮樣は此の婆さんは、若しや兄宮樣のことを知つてゐるかもしれんと思つて、急いで近よつて尋ねになると、婆さんは、しばし首をかたげて居ましたが、其やうな御方には御目にかゝりませんが數は、たしか十一と覺えました鶴の青空高く飛んで行くのを見ましたよといひました、扨ては、ひよつと其ではなからうかと心つき、其場所は何處でありますかとお尋ねになりますと、此の道の通りにおいでなさいますと、大きな川が海に落ちて居る所がありますが、其處ですと、敎へてあげました、宮樣は大そう悅んで禮をのべ一時もはやくと其通りに行くと、果して十一の白い羽の上に水玉の幾個となく付いたの

が落ちて居るを御覧になりました、保宮様は此を見て扨ても此は鳥の羽であるが此の水玉は露であらふか、涙であらふかと思案しながら、早く兄様達に逢ひたい〳〵といふ心が胸一杯ですから、此廣い果しもない海原を彼方此方とながめになりても、中々御心地のよいことはありませんので、却て御自分で勇氣をつけながら遂に思ひ切つて、こゝの濱邊に敷きつめてある、小石が大波小波にゆられ、うたれ、いつとなく其角がなくなつてしまつたように、自分もいつまでも堪え忍び望を固く保つて居りましやうと、思案を定めになつた、日もだん〳〵と西の方へ傾きましたので沙の小高くなつて居る處を探し、此處で今夜を明さうと、諸方を尋ねられましたが、トゥ〳〵見當りました時は、日もはや二三分の間でかくれる瞬間でありました、此の時何處からか一群の眞白な大小種々の鳥が飛んで來た、太陽の光がなくなると同時に立派だと思つた羽はソックリと抜けました、此れは不思議と愕いて、見つめると、いつかのまにか鳥の形は消えて、人が其中から顯はれました、これはいよ〳〵不思議と猶よく御覧になると、永い以前にわかれになつた、こがれ慕つて居る兄君達であつて、其昔の面影は少しも變つていないのだから、大層悦になつて又双方とも其奇遇に驚き、しばしは言葉もいでず唯だ嬉涙に咽んで居られた。

保宮は先づ自の上の事を語り盡し、此度は兄君様の物語を聞かれると、兄君様達は自分

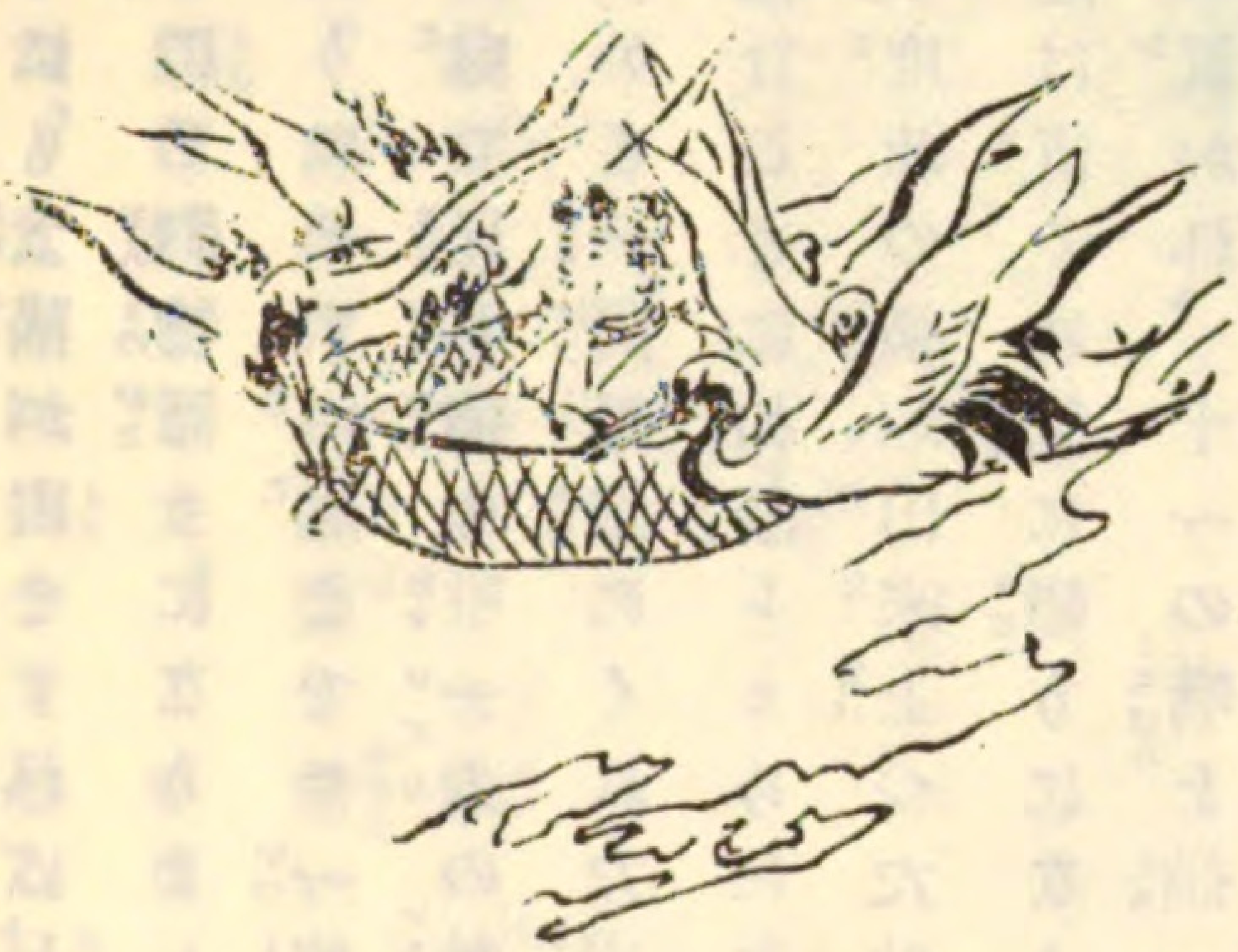
等は不幸の身の上で太陽が地平線上にあらはれますと直樣鶴になり、此の海を渡つて今日まで無事に送り、又太陽が地平線下に沈む時は、忽ち元の人間の身にかわるといふ淺猿しい有樣となつて居るから、此の樣に人間の形で、いつまでも居ることは出來ない、今にも太陽が出ますれば、直ぐと翔け初めるのであると涙ながらに十一人の兄君達が同音にて御物語りになりました、保宮樣は今逢つたとは誠にうれしい、どうか私一人を置去りにせず何處までも一緒に連れてと泣き縋りになつた。

其處で兄君達も唯一人の妹を獨り置き去りにいたすことは可愛想だ、どうしたらよからうかと一同思案にくれた末、木の枝を集め皆總がかりで大急ぎで明朝までに一つの網を編むことに和談をきめになつた。

丁度此の網が出來上つた時、はや太陽が地平線上から輝き初めましので、十一人の兄樣達は直ぐに鶴に變りになりまして、保宮を靜かに、其作りかけの網の中に移し、安らかに置かれ、十一の嘴を揃へて此の網を銜へて運んだ、此處からは陸の上でなく空中を高く或は低く飛び廻り一同が思ふがまゝに唯だ面白く翔りましたが、此網は誰一人も離すことはせず確りと大層大切に持つて居りました。

づん／＼飛んで丁度海の中頃と思ふ所で急に大暴風が起つて、波は高くうちあがり、風は烈しく吹きすさんで、一瞬時毎に強くなるばかりでありましたが、此困難中でも一同

ダの網を護て、さて此海を渡りますには、二日かゝりますから、一夜は是非とも海の中で明かさねばなりませんが、よきことには丁度中程に岩が海面に突き出て居りますのでせめて一夜の生命の宿。



はや太陽は入り近く爲て來ましたが、波風は愈々荒くなるばかり、何時あの處へつけるか、わからないので一同はやきもきして、精一杯に飛びかけましたが、はや太陽は地平線下にかくれてしまいました。

今までの鶴は、忽ち人間にかわつて下へと落ちました、もう生命はないものと諦めてゐましたに、幸にも、其處は夫の生命の宿とたのむ岩の上でありました、岩の上にはドシ／＼と波が當てますによつて互に助け合てもこの保宮を護りなすつた、さうする内に暴風はやみ、東の空は白みだし、朝暾がパッと輝き初めました時は、十一の鳥はまたもや網をくわへてこの海の彼處にある國指してとび出しました。

廣いはてもない大空をかけりまわるのですけれども、兄君達に連れられたのだから、何も心痛はなく、上を仰ぎ見ては空の色の見事なことや、はてしもなく廣やかなことを思

ひ、下を望では遠く彼方に見ゆる山河或は小さい森林、村落などや、時に鯨が大きな音して水をはき出すことなどを、見れば如何にも樂しく安心して二日の旅も何事なく終ました、此の國の入口なる山の洞穴に着いたが、兄君達は一人の妹を大切に思はれ、何事よりも最先にこの洞を奇麗にかたづけ、入口には種々の草花或は蔦蔓の類を以て飾りつけて、戶の代用としたから、道具といふものは何一つありませんけれども、大層心持のよい住居が出來た、今宵は兄君達も餘程に疲れて、少しも話をしないで眠になつた、唯だ保宮ばかりは頻と兄君達の晝の間は鳥におかわりになるとを思つゞけて、睡眠もせずたゞ神に祈をして、いかにも心痛の樣子でありましたが、いつの間にか、つい、とろとろと眠になつた、スヤ〱と眠つてある間に、ピカ〱と雲の間から光が顯はれて、一人の天女ともいふべき御方が手に青々として刺のある草の一束を持ち、頭にはまばゆく輝く星を頂き、保宮の枕邊に立ちより、大音樂者が調樂をするやうな調子の聲で申さるゝには、御前が熱心に祈つて居ることを叶へてやらうほどに、其代り私がいふことを一伍一什用ゐなければならぬ、其は此の山のめぐりにある刺草をつみとり兄宮達の衣類を編み上げ、これが悉皆出來上つて肩にかけるまでは、一言たりとも物をいふことは出來ない、若し其通りにせば兄宮達は必ず元の身の上に返るぞよ、と言つて形は消え失せ、其邊は元の如く闇になりました。

保宮様は目を醒して後、大層喜んだが、夢であつたため、殘念がつたが、ふと其側を見なすつたら、一束の刺草が落ちて居るのを、見出しになつた、そこで此は眞實の事であるかしらんと、思つて其刺草を集め着物を編むことに決定になつた、(刺草は之にさわると其部はブツ〱と腫れあがり中々いたむもの)かうして初めになりました時、一番若い兄さんの鳥が來た、いつでも妹は喜んで何かといろ〱な話をなさるに、引代え今日に限つて全く口を閉ぢ、たゞ手まねで、話をすることとは出來ないと示したので、此を見て大層困り、何か譯の有ることだらうとお思ひなされ、せめては此手の痛む處なりとも、直してやりたいものと、思はず涙をこぼしましたら、丁度痛む腫物の上へ落ちました、すると今まで痛みました所は直様直り此度はいくら刺にさゝれても腫もせず痛もせずに、ずん〱と仕事がはか行くようになつたので、保宮も精出しておもしろく働きになつた。



此の樣にしてお働きになり二三日過ぎると或る晝過、前山の方から喇叭の音がする、はて何事の起たことかと、耳そば立てゝおいでになりますと、一頭の獵犬が勢猛しく此の

洞穴へ參り、切りと吠へ初めました、大勢の人々は嘸良い獲物のあるならんと此の草花の戸を押して這入て見ますと、思もかけぬ、門の草花の美にも增した一人の乙女、手を動かし何やら仕事をして居る、一同は驚愕の餘り、直樣元の處へ戻り主人なる皇太子殿下へ言上ましたれば、殿下も行つて御覽じて色々と御話しかけなさいましたが、一向何の應答もありません、併し其美貌にほと〳〵感心して保宮の固く辭退なさるに係はらず、御乘馬に移し宮城へと御連になりました、其上で色々となだめすかして、御試みなさいましたが、少しもきゝめがありませんでした、殿下は此處に暫く置いて時日が立つたならば定めて人々にも馴れ親しみ、口を利く樣になるだらふと考えて、其時の來るのを待つていられた、そうして其居室は彼の洞穴の住の樣子に似せて作らせたが、此處で用になつた品物は山とは全く違つて澤山見事な花で意匠をこらして飾らせ宮の心に協ふよふにとつとめられ、其外にも萬事萬端皆な充分なる待遇をなした、保宮は彼の穴に住ひの時と同じく、朝早くから日が暮れるまで、勉强して編みつゞけ少しの間も手を離さず精出しになつた。

此宮城付の侍從の一人はこの保宮を見て、いとゞ不思議に思ひ、巫女ではあるまいかといふ疑念を起し、事につけ物に當つて、其正躰を見定めんと頻りに氣をつけて居りました、或る日の事でした刺草が皆無くなりましたから、宮は此の邊で之を摘み取るには墓

場に限ると思つた、けれども宮中より其處へ集めに行くことは中々むつかしいから、人々の寢靜まつた眞夜中そつと起き上り、單獨で墓場を指して出懸になりましたが、墓場といふものは、晝でさへも何となく薄氣味の惡いものですが、まして草木も眠る眞夜中、平生健氣な氣性でサアトいふ場合には荒男をさへ、ひしぐといふ勇氣がありますけれども、今夜はゾツト怖氣立ち、しばらくは、墓場の入口にたゝずんで先へ進む勇氣はありません、がこのやうに恐れていては折角來た甲斐がないから此處一番と奮發なさいまして、自身で勇氣をつけ墓場の中へ這入りになつた、スルト何かガチ〳〵ゴリ〳〵と音がしますから、近寄て見ますと顏は婦人らしく躰は狼といふ世にも極く稀な「レムーレン」といふ獸が其食物をあさりに來て新墓をあばき、死人の肉をむしり食つて居るのであつて其口をあけて居つたあり樣は、實に身の毛もよだつやふでありました、此の時保宮の後に密かに付てまゐりました侍從は、此を見まして、多分此の獸は譯があると思ひましたけれども、一度計りでは、其正躰を確めることができないから、數日過ぎて後、又刺草が無くなつた其夜も、保宮の出て行つたをうかゞひ、後より附てまゐりましたが、其有樣は先夜と同じことでありました、そこでいよ〳〵たしかな事と度胸を据え、此を皇太子殿下に奏上いたしましたが、殿下は之を信じなさらないので、侍從は今度は隨供をしますから、實地を御覽あれと太子にすゝめて其夜を待て居た。

保宮は終に着物を編み上げになりましたが、まだ少し草が足りませんので、其を摘み取るため、今夜も眞夜中、密と忍び出になりました、勿論誰も後に付いて來るとは夢にも知らないが、「レムーレン」は矢張先夜の通り居りました、皇太子殿下は此光景を御覽して一方ならず驚駭になりましたが、氣を沈めて實見し終り、今は侍從の言つた通り、彼女は怪しいに相違ないと信じ、明日は之を裁判に持ち出し必ず罪に當てねばならぬと決心になり、翌日直と文武の百官を集めて審判を初めました、塲中は皇太子殿下を初めとして貴族、大臣、其他の人々幾百名威儀整然として幷み居る處へ保宮は一人の侍從に助けられて出廷になつた、裁判は初まりましたが何を正さるゝも一言も答がなく、唯俯向いてあるが氣凛として誰人にも動かされぬ樣子は見えました、役人達は彌々怪物と決定して火あぶりの罰にせよと宣告をした、それで直樣獄屋へ送られますと獄守は他の囚人よりも一層むごく取扱ひ、夜具といふものは何一つやらず、此はお前のすきなものだからといつて、刺草編の着物を取て之を一纒にして獄屋へ投げ入れてやりました、保宮は斯樣に色々とつらひ目に逢つても、少しもうらまず、倦まず、撓ゆまずに、切りに手を働かして居なされたが、毎日晝の間は何處からか小さな鳥が來て、誠に美しく歌を囀り、夜は又廿日鼠が出で、深切に草をくはへ集めて保宮の手助をいたします、斯の如くしてだん／＼日が經つ内に、はや火刑になる日となりましたが、其車は至つて粗末で蔽物も

なく、どんな大罪人であらふと思はれる程に酷い取扱を受け、又此車の通る沿道の人々も、皆戸外へ飛び出して罪人の容子を見て、或は石をなげ或は悪口をいひ誠にあはれの極でありました、恰も車が少しばかり行きました時、何處からか眞白な鶴が飛でまゐつて人々の見えぬやうに保宮の周圍を取巻きました、いかにも不思議の事であるから、幾千萬の見物人はこは何事かと疑がつた、保宮は道すがらも、少しも手を休めず、殘の袖を作りながら刑場へ着になつた時は、はや片袖丈け殘つて居る計りになりましたが、もう何程氣を揉んでも仕上ることは駄目です、刑場には薪が高く積み上げてあり、役人はチヤント用意を整へて嚴しく傍に立ち、今にも號令さへかゝれば火を點けんとして居ます、此の一刹那唯だ一人の妹なれば、どうかして助けてやりたいと、萎れ切つて居る十一羽の鶴を保宮は打眺めて出來上つた丈けの着物を取りさつと此の鳥を目かけて、投げつけました所、工合よく皆一羽一羽の肩にかゝり、着物は見る間に自然と垂れて全身を蔽ひました、スルト不思議にも見る／＼今までの白鶴は忽ち其形を代へ、十一人の立派な男となりました、保宮は幾月といふ永い間、一言たりとも言出しにならなかつたが此時高々と、而も麗しい聲で「私は何の罪もない」と仰しやつた、そこで皇太子殿下を初め有司百官此場に立ち合ふた者、幾萬といふ見物人も悉く此意外に仰天して、手に火を持てる者は恐れて逸早く之を棄て何處へか逃げ去り、人々は騒ぎ立ち、暫時はいかなる椿事

の起ろやらむと思はれました、ところが積み重ねてあつた薪は何時の間にか今を盛りと咲きみだれたる香の高き薔薇と代りました、皇太子殿下は之の樣子を見て夢の醒めた樣に恍然として保宮を熟視して居なされたが、直樣薔薇二三輪を手づから摘み取つて、保宮の胸の邊にかざし又携へて自身の乘物に移し宮城へ連れ歸りになりました。

皇太子殿下は何故に、あのやうな事情になつたかといふ委細を聞いて感に入り心にいたく嘉賞し、父の王樣の許可を得て保宮の父王と相談が整つた上皇妃となられたが、唯だ氣の毒なのは十一番目の宮で、片袖が出來上らないばかりで、片腕は矢張り鶴の翼であつたといふことです。

（完）



が落ちて居るを御覽になりました、保宮樣は此を見て扨ても此は鳥の羽であるが此の水玉は露であらふか、涙であらふかと思案しながら、早く兄樣達に逢ひたい〳〵といふ心が胸一杯ですから、此廣い果しもない海原を彼方此方とながめになりても、中々御心地のよいことはありませんので、却て御自分で勇氣をつけながら遂に思ひ切つて、こゝの濱邊に敷きつめてある、小石が大波小波にゆられ、うたれ、いつとなく其角がなくなつてしまつたように、自分もいつまでも堪え忍び望を固く保つて居りましやうと、思案を定めになつた、日もだん〳〵と西の方へ傾きましたので沙の小高くなつて居る處を[illegible]此處で今夜を明さうと、諸方を尋ねられましたが、トゥ〳〵見當りました時は、[illegible]や二三分の間でかくれる瞬間でありました、此の時何處からか一群の眞白な大鳥が飛んで來た、太陽の光がなくなると同時に立派だと思つた羽はソックリ[illegible]た、此れは不思議と愕いて、見つめると、いつかのまにか鳥の形は消えて、人[illegible]ら顯はれました、これはいよ〳〵不思議と猶よく御覽になると、永い以前に[illegible]つた、こがれ慕つて居る兄君達であつて、其昔の面影は少しも變つていな[illegible]大層悦になつて又双方とも其奇遇に驚き、しばしは言葉もいでず唯だ嬉[illegible]れた。

保宮は先づ自の上の事を語り盡し、此度は兄君樣の物語を聞かれると、[illegible]達は[illegible]

等は不幸の身の上で太陽が地平線上にあらはれますと直樣鶴になり、此の海を渡つて
日まで無事に送り、又太陽が地平線下に沈む時は、忽ち元の人間の身にかわるとい
猿しい有樣となつて居るから、此の樣に人間の形で、いつまでも居ることは出來な
今にも太陽が出ますれば、直ぐと翔け初めるのであると涙ながらに十一人の兄君達
音にて御物語りになりました、保宮樣は今逢つたとは誠にうれしい、どうか私一人を置
去りにせず何處までも一緒に連れてと泣き縋りになつた。
其處で兄君達も唯一人の妹を獨り置き去りにいたすことは可愛想だ、どうしたらよから
うかと一同思案にくれた末、木の枝を集め皆總がかりで大急ぎで明朝までに一つの網を
編むことに相談をきめになつた。
丁度此の網が出來上つた時、はや太陽が地平線上から輝き初めましたので、十一人の兄樣
達は直ぐに鶴に變りになりまして、保宮を靜かに、其作りかげの網の中に移し、安らか
に置かれ、十一の嘴を揃へて此の網を銜へて運んだ、此處からは陸の上でなく空中を高
く或は低く飛び廻り一同が思ふがまゝに唯だ面白く翔りましたが、此網は誰一人も離す
ことはせず確りと大層大切に持つて居りました。
づん〳〵飛んで丁度海の中頃と思ふ所で急に大暴風が起つて、波は高くうちあがり、風
は烈しく吹きすさんで、一瞬時毎に強くなるばかりでありましたが、此困難中でも一同

[illegible]は鳥の羽であるが此の水
[illegible]たいくといふ[illegible]

[illegible]



[illegible]までの[illegible]
生命はないものと諦[illegible]
命の宿をたのむ岩の上で[illegible]
波が當てますによつて互に助け合つて[illegible]
た、さうする内に暴風はやみ、東の空は[illegible]
ッと輝き初めました時は、十一の鳥はまたもや[illegible]
この海の彼處にある國指してとび出しました。

廣いはてもない大空をかけりまわるのですけれども、兄君達に連れられたのだから、何も心痛はなく、上を仰ぎ見ては空の色の見事なことや、はてしもなく廣やかなことを思

した、此の國の[illegible]

ひ、下を望では遠く彼方に見ゆる山河或は小さい森林、村落などや、時に鯨が大きな音して水をはき出すことなどを、見れば如何にも樂しく安心して二日の旅も何事なく終ました、此の國の入口なる山の洞穴に着いたが、兄君達は一人の妹を大切に思はれ、何事よりも最先にこの洞を奇麗にかたづけ、入口には種々の草花或は蔦蔓の類を以て飾りつけて、戶の代用としたから、道具といふものは何一つありませんけれども、大層心持のよい住居が出來た、今宵は兄君達も餘程に疲れて、少しも話をしないで眠になつた、唯だ保宮ばかりは頻と兄君達の晝の間は鳥におかわりになることを思つゞけて、睡眠もせずたゞ神に祈をして、いかにも心痛の様子でありましたが、いつの間にか、つい、とろとろと眠になつた、スヤ〳〵と眠つてある間に、ピカ〳〵と雲の間から光が顯はれて、一人の天女ともいふべき御方が手に靑々として刺のある草の一束を持ち、頭にはまばゆく輝く星を頂き、保宮の枕邊に立ちより、大音樂者が調樂をするやうな調子の聲で申さるゝには、御前が熱心に祈つて居ることを叶へてやらうほどに、其代り私がいふことを一伍一什用ゐなければならぬ、其は此の山のめぐりにある刺草をつみとり兄宮達の衣類を編み上げ、これが悉皆出來上つて肩にかけるまでは、一言たりとも物をいふことは出來ない、若し其通りにせば兄宮達は必ず元の身の上に返るぞよ、と言つて形は消え失せ、其邊は元の如く闇になりました。

保宮様は目を醒して後、大層喜んだが、夢であつたため、殘念がつたが、ふと其側を見なすつたら、一束の刺草が落ちて居るのを、見出しになつた、そこで此は眞實の事であるかしらんと、思つて其刺草を集め着物を編むことに決定になつた、(刺草は之にさわると其部はブツ〳〵と腫れあがり中々いたむもの)かうして初めになりました時、一番若い兄さんの鳥が來た、いつでも妹は喜んで何かといろ〳〵な話をなさるに、引代え今日に限つて全く口を閉ぢ、たゞ手まねで、話をすることとは出來ないと示したので、此を見て大層困り、何か譯の有ることとだらうとお思ひなされ、せめては此手の痛む處なりとも、直してやりたいものと、思はず涙をこぼしましたら、丁度痛む腫物の上へ落ちました、すると今まで痛みました所は直樣直り此度はいくら刺にさゝれても腫もせず痛もせずに、ずん〳〵と仕事がはか行くようになつたので、保宮も精出しておもしろく働きになつた。



此の樣にしてお働きになり二三日過ぎると或る晝過、前山の方から喇叭の音がする、はて何事の起たことかと、耳そばだてゝおいでになりますと、一頭の獵犬が勢猛しく此の

洞穴へ參り、切りと吠へ初めました、大勢の人々は嘸良い獲物のあるならんと此の草花の戸を押して這入て見ますと、思もかけぬ、門の草花の美にも増した一人の乙女、手を動かし何やら仕事をして居る、一同は驚愕の餘り、直樣元の處へ戾り主人なる皇太子殿下へ言上ましたれば、殿下も行つて御覽じて色々と御話しかけなさいましたが、一向何の應答もありません、併し其美貌にほと〳〵感心して保宮の固く辭退なさるに係はらず、御乘馬に移し宮城へと御達になりました、其上で色々となだめすかして、御試みなさいましたが、少しもきゝめがありませんでした、殿下は此處に暫く置いて時日が立つたならば定めて人々にも馴れ親しみ、口を利く樣になるだらふと考えて、其時の來るのを待つていられた、そうして其居室は彼の洞穴の住の樣子に似せて作らせたが、此處で用になつた品物は山とは全く違つて澤山見事な花で意匠をこらして飾らせ宮の心に協ふよふにとつとめられ、其外にも萬事萬端皆な充分なる待遇をなした、保宮は彼の穴に住ひの時と同じく、朝早くから日が暮れるまで、勉強して編みつゝけ少しの間も手を離さず精出しになつた。

此宮城付の侍從の一人はこの保宮を見て、いとゞ不思議に思ひ、巫女ではあるまいかといふ疑念を起し、事につけ物に當つて、其正躰を見定めんと頻りに氣をつけて居りました、或る日の事でした刺草が皆無くなりましたから、宮は此の邊で之を摘み取るには墓

場に限ると思つた、けれども宮中より其處へ集めに行くことは中々むつかしいから、人々の寢靜まつた眞夜中そつと起き上り、單獨で墓場を指して出懸になりましたが、墓場といふものは、晝でさへも何となく薄氣味の惡いものですが、まして草木も眠むる眞夜中、平生健氣な氣性でサアトいふ場合には荒男をさへ、ひしぐといふ勇氣がありますけれども、今夜はゾツト怖氣立ち、しばらくは、墓場の入口にたゝずんで先へ進む勇氣はありません、がこのやうに恐れていては折角來た甲斐がないから此處一番と奮發なさいまして、自身で勇氣をつけ墓場の中へ這入りになつた、スルト何かガチ／＼ゴリ／＼と音がしますから、近寄て見ますと顏は婦人らしく躰は狼といふ世にも極く稀な「レームーレン」といふ獸が其食物をあさりに來て新墓をあばき、死人の肉をむしり食つて居るのであつて其口をあけて居つたあり樣は、實に身の毛もよだつやふでありました、此の時保宮の後に密かに付てまゐりました侍從は、此を見まして、多分此の獸は譯があると思ひましたけれども、一度計りでは、其正躰を確めることができないから、數日過ぎて後、又刺草が無くなつた其夜も、保宮の出て行つたをうかゞひ、後より附てまゐりましたが、其有樣は先夜と同じことでありました、そこでいよ／＼たしかな事と度胸を据え、此を皇太子殿下に奏上いたしましたが、殿下は之を信じなさらないので、侍從は今度は隨供をしますから、實地を御覽あれと太子にすゝめて其夜を待て居た。

保宮は終に着物を編み上げになりましたが、まだ少し草が足りませんので、其を摘み取るため、今夜も眞夜中、密と忍び出になりました、勿論誰も後に付いて來るとは夢にも知らないが、「レームーレン」は矢張先夜の通り居りました、皇太子殿下は此光景を御覽して一方ならず驚駭になりましたが、氣を沈めて實見し終り、今は侍從の言つた通り、彼女は怪しいに相違ないと信じ、明日は之を裁判に持ち出し必ず罪に當てねばならぬと決心になり、翌日直と文武の百官を集めて審判を初めました、場中は皇太子殿下を初めとして貴族、大臣、其他の人々幾百名威儀整然として幷み居る處へ保宮は一人の侍從に助けられて出廷になつた、裁判は初まりましたが何を正さるゝも一言も答がなく、唯俯向いてあるが氣凛として誰人にも動かされぬ樣子は見えました、役人達は彌々怪物と決定して火あぶりの罰にせよと宣告をした、それで直樣獄屋へ送られますと獄守は他の囚人よりも一層むごく取扱ひ、夜具といふものは何一つやらず、此はお前のすきなものだからといつて、刺草編の着物を取て之を一纒にして獄屋へ投げ入れてやりました、保宮は斯樣に色々とつらひ目に逢つても、少しもうらまず、倦まず、撓ゆまずに、切りに手を働かして居なされたが、毎日晝の間は何處からか小さな鳥が來て、誠に美しい歌を囀り、夜は又廿日鼠が出で、深切に草をくはへ集めて保宮の手助をいたします、斯の如くしてだん／＼日が經つ内に、はや火刑になる日となりましたが、其車は至つて粗末で蔽物も

なく、どんな大罪人であらふと思はれる程に酷い取扱を受け、又此車の通る沿道の人々も、皆戸外へ飛び出して罪人の容子を見て、或は石をなげ或は悪口をいひ誠にあはれの極でありました、恰も車が少しばかり行きました時、何處からか眞白な鶴が飛でまゐつて人々の見えぬやうに保宮の周圍を取巻きました、いかにも不思議の事であるから、幾千萬の見物人はこは何事かと疑がつた、保宮は道すがらも、少しも手を休めず、殘の袖を作りながら刑塲へ着になつた時は、はや片袖丈け殘つて居る計りになりましたが、もう何程氣を揉んでも仕上ることは駄目です、刑塲には薪が高く積み上げてあり、役人はチヤント用意を整へて嚴しく傍に立ち、今にも號令さへかゝれば火を點けんとして居ます、此の一刹那唯だ一人の妹なれば、どうかして助けてやりたいと、萎れ切つて居る十一羽の鶴を保宮は打眺めて出來上つた丈けの着物を取りさつと此の鳥を目かけて、投げつけました所、工合よく皆一羽一羽の肩にかゝり、着物は見る間に自然と垂れて全身を蔽ひました、スルト不思議にも見る〳〵今までの白鶴は忽ち其形を代へ、十一人の立派な男となりました、保宮は幾月といふ永い間、一言たりとも言出しにならなかつたが此時高々と、而も麗しい聲で「私は何の罪もない」と仰しやつた、そこで皇太子殿下を初め有司百官此塲に立ち合ふた者、幾萬といふ見物人も悉く此意外に仰天して、手に火を持てる者は恐れて逸早く之を棄て何處へか逃げ去り、人々は騷ぎ立ち、暫時はいかなる椿事

の起るやらむと思はれました、ところが積み重ねてあつた薪は何時の間にか今を盛りと咲きみだれたる香の高き薔薇と代りました、皇太子殿下は之の樣子を見て夢の醒めた樣に恍然として保宮を熟視して居なされたが、直樣薔薇二三輪を手づから摘み取つて、保宮の胸の邊にかざし又携へて自身の乘物に移し宮城へ連れ歸りになりました。

皇太子殿下は何故に、あのやうな事情に、なつたかといふ委細を聞いて感に入り心にいたく嘉賞し、父の王樣の許可を得て保宮の父王と相談が整つた上皇妃となられたが、唯だ氣の毒なのは十一番目の宮で、片袖が出來上らないばかりで、片腕は矢張り鵠の翼であつたといふことです。

（完）



夏の月（上）

蘆花生



妾は不斷そう思ふのですよ、人間は何如樣な事があらふと決して自棄を起すものぢやありませんね。それはもう海人が鹽燒くと云ふせち辛い世の中ですもの、五十年七十年の間には隨分憂ひ事つらひ事、たまには死にたい程くやしい事もありますわ。意地の惡い天道樣自分一人を繼子になさつて、あゝいやだ〳〵いつそ舌でも咋ひ切るか、淵川へでも身を投げて仕舞はうと、斯う思ふこともあるものです。でもね、此處が人間一生浮沈の別れ時で、斯の處を眼をねぶつてぢつと持堪へて居さへすると、天道樣の秤はすぐとまた逆戻り、沈むだものは浮き上つて、枯株にも芽がふきますよ。或人の歌に、

うれしきもうきもうき世の村時雨
しばし忍ぶの軒に過き行く

ね、「しばし忍ぶ、しばし忍ぶ」此しばしば忍ぶが大事なのです。さ、此處の辛抱が出來ない

で、つい自棄から一生をさゝはうさにして仕舞ふと云ふは、情けない譯ぢやありませんか。よく昔話に云ひますね、苦勞の重荷を背負つて居る人間が他人の荷物は輕そうだと羨むで居るのを、天道樣が愍れと思召して、それなら荷物の取り替へッこをしろと仰有つたので、皆喜んで自分の荷物を放下して、偖他人の荷をあれ此れと背負つて見ると、是はしたりし、何れも〳〵吾荷より餘ッ程重いものばかり、餘儀なくまたもとの吾荷を背負つたと云ふ話がありませう。誰の身にも荷物ァ有りまさァね。坐蒲團で拵へた人形さまを背負ッて居る花ちやんでも、ね、日本を肩に背負ッて居る何某の大臣さんでも、皆それ〳〵荷物はあるのですよ。妾なんぞは斯樣な見るかげも無い獨り者、針仕事やお手習の稽古をして、其日暮らしの者ですが、それでもね、自分を大切にしますの。エ、間違ちやァいけませんよ、大切にするたッて、美食をたべたり、美衣を着たりして、そしてお人柄を作るのぢやありませんよ。生意氣な事を言ふ樣ですが、人樣の御厄介にならぬ樣、百萬兩の旦那の御機嫌取でもなければ、橋の下の乞食さんに拳突一とつ喰はすでなし……、……なぞゝ云ふと、何だかお談義の樣ですが、ホントニ妾は其樣思つてますよ。おほゝゝ、妾の素生ですか、なに御話し申す程の素生でもありませんわ。エ、是非話せッて仰有るの、話しますよ、隱す程の事もありませんからね。でもね、笹の一葉も露とやらで、妾相應に些とは背負つた荷もありますの。あなた方はまあ是れからが苦

み咲くと云ふのですから、面白い事も澤山ありませうが、また隨分つらい事もありますよ。妾なんぞ大した事もありませんが、此でもしみ〴〵身に覺へて居ることもありますよ。では、話ませうかね、妾の素生を。さあ美いさんも露ちやんも德ちやんもずつと此方へ御寄りなさい。エ、眠りつこなしですよ。今夜は蚊が居なくて宜いことね。おや、ランプが消へてしまつた。なに、德さんようムいますよ、此様に疊の上まで月がさしますからね。おゝ涼しいこと。御覧なさい、楢の葉がきら〳〵まるで玉の様ですね。では話しますよ、おほゝゝゝ、あらたまッて何だか話し家の様ですね、おほゝゝゝ

よくソレ西國中國邊で歌ふ

「船頭可愛や、音戸の瀬戸で、一丈五尺の櫓がしはる」と云ふ舟謠を知つて居ませう。妾はね、其音戸で一と云はれた酒家の一人娘でしたの。今ぢや人の有になつてますが、妾の家は田舎での大家でね、腥い藁葺や矮い瓦屋の眞中に巍然と立つた白壁の土藏造りは隨分入舟の目標になつたもので、今でも汽船であの邊りを通つたら、依然青々として潮の流れに映つて屹と立つて居ると思ひますよ。船つきと云ふものは、ドゥも風儀が惡くッてね。ですが、妾の內では珍らしい堅氣揃ひで、奉公人も大勢使つてましたが、短くても五六年長いのは二十年も三十年も勤めたと云ひます。でもね、災難の降つて來る時は

仕様のないもので、父は妾がまだ母の乳房を啣へて居る内に、灘へ何か仕入れに行く途中で難船して、水島灘の藻屑になつて、それからと云ふものは母もがつかり弱つて、つい其秋風邪から病みついて、妾をひしと抱きしめたまんま泣き死にゝ死んで仕舞ましてね。思へば此が妾の一生の不仕合の始でしたよ。それから妾は父の實弟で荒物屋をして居た叔父の内に引取られて、家業は叔父の監督で永年勤めて居た實躰な番頭にやらせる事になつたそうですが、何を云ッてもねヱ、親のない者ほど哀れな者はありませんわ。お金〳〵と近頃は金ばかり持囃す世の中になりましたが、億萬圓でも買はれないのは親の愛でせう、なんぼお金があるたッて、牛乳羊乳は買つても飲みませう、乳母は雇いもしませうが、母親の乳房は買はれますまい。妾も其頃はまだあんよが上手の頃でしたから、何の譯も知らないで、たゞ母に別れてから恐ろしく虫氣が起つて夜晝啼通しに啼いて居たそうですが、段々大きうなるにつけて始終思ふのは此事ばかり、今日が日までもあゝお母さんが居たらお父さんが御出なすつたらと思はぬことはありませんよ。兎角人間と云ふものは我儘なものでね、親が達者で居る間は勝手氣儘も云ひもし爲もするものですが、さあ別れると唯もう「なきてぞ人は戀しかりける」で、あゝ惡かつた、と氣のつく時は最早親は無言の石塔＝＝あゝ話がわきへそれましたね。





錢物語　勝間禪夢

（一圓銀貨と一厘錢の來歷）

玆に隱居老婆の臍繰巾着を暫時の宿泊と賴み身を寄せたる二人の男ありけり、一人は一圓銀貨と呼ばれ年齡三十許、色は雪を欺き、優にやさしき姿は光る源氏の面影も斯くや又一人は一厘錢と呼ばれ生時は寬永と歲經れど皺一條も寄らで健全な武骨老爺、色炭に似たるは世に謂ふ鐵光の本場か、此男御鳥目と綽名されしは圓いなかに孔あるためなるべし、二人共にその德の天下に炳然なれば諸人之を世の寶と崇めて難有がりぬ、されど同類相嫉む商賈敵のことゝて銀貨の男は一文錢の老爺を嫌ひ、一文錢の老爺亦た銀貨の男を惡む、斯るが故に曾て同席せしこと無く、若し共に蟇口に住むことあれば、銀貨の男は必ず部屋を別ちて曾つて夫婦の語ひも念友の契もなし、こゝに二人が旅寢せる此の巾着は別に坐敷の設もあらぬ荒屋なるに、折ふし憂事ある身に友懷かしく互に寄添ひ花にもあらず月にもあらで行春の夜の我にはつれなきを恨み己がじゝ思のたけを語らひけ

る。
何と爺殿開かれずや、此度日本の掟改まりて、我等も爺殿も諸共に世に頼無きものとなり、淺間しや來年よりは我等が天下金貨の兄に奪ひ取られ、我子の五十錢、二十錢、十錢の三人のみ僅に此世に生殘りて餘命を繋げど、それさへ黄金の光には肩身が狹く、如何に天下は廻り持とは云ひながら變り行く錢の末こそ悲しけれ、爺殿のごと寛永に生れて幾久しき長の年月命冥加に生延びたる身は此世に未練も有るまじけれど、まだ三十歲に成るや成らずの勘平此世をば見果てぬ夢の醒めてし如く、はかなく棄て行く我身こそいとゞ哀しさ遣瀨なき、されどこれも定まる緣の我等の力に及ばねば今更女々しく人も恨まじ世も喞たじ、さりながら冥土の旅出も近きにあれば、我等が爲せし數々互に話し話されつ、此世の名殘の語草、いでや我より始めてん。
我等互に人の手を借り浮世を渡るが職業なれば、天命ならで賴み難き人命のまゝに、今日は巾着に宿借るも、明日は誰が店の錢箱やら、その又明日は何處の竈口やら、行方定めぬ身とは云ひながら、願ふは沈香のにほひ床しき貴人の手にもや觸れて、面白可笑しく暮したやと念じ、事の徒ならで、天運よくも、粹なる人に可愛がられ、洒落た場所にのみ使はれて、爺殿のやうに道傍に兩手差出す乞食風情を始めとし烏羽玉の暗路を辿る車夫が草鞋の代や蠟燭代、お三諸共に勝手口密々出でゝ行き過ぎぬ間の豆腐買、さる

賤しき事なく一年或る御屋敷に住み込みて、手提革鞄に入れられて何時も若殿の御供となり、表玄關を公然と、走るに騎馬あり、自轉車あり、乘るに馬車あり、腕車あり、四季折々の物見遊山に花車風流、時に若殿の齒の浮く語も聽きながらも、侍女愛妾の艷姿に眼を喜ばし、世に有る程の氣樂を仕盡せしが、已むなき事の爲め其家を暇取り御用商人の手に渡りてより、それからそれと役者、落語家、藝者、女郎、種々と可笑味ある人の懷のみ經廻りて、芝居、人寄世、待合、船宿は言ふまでもなく歌舞の菩薩が妍を爭そふ廓の內、茶屋、揚屋、粹な家のみ往來して、面白き事の限に逢ひ、我ながら己が果報に驚き居けるが、不圖田舍大盡に伴はれて、遠き越路に下りて、藏の金庫に押籠められて、さらぬだに雪國の寒く心細げなるを、烏羽玉の暗さは暗し冷さは又格別の其中に、六年の憂き月日を詫住居、籠の鳥かや網の魚、牢屋に繫ぐ囚人の苦しさ忍ぶ身の罪重きにや、配所の月さへ日さへ拜まれず、これといふ遊興三味に贅澤爲過ぎし我身の尤、あな恐ろしの天罰と身から出たる銹よと悔みしが、さりとても馴來し方の花も忘られず、娑婆の風をも偲ばれて、今一たびは出たや此の藏、見たや浮世をと思へど、何と詮方泣々も憂を堪へ／＼し六年目、藏を破りて押入りし盜人の爲めに救ひ出され、行方白浪北の海、渡るは鳥か舞鶴に、聽て岡目や高見見物賭場の狀、一六勝負チョボ一や采を伏せたる賽の懸目の偶か奇かを爭そふ聲の姦しき、此處を先途と戰ひて虛々實々

の秘術を振ひ、勝つて圖に乘る、負けて焦、取るものあれば取らるゝも、荒々しき此の戰場を我唯一人縱横無盡に駈け廻る面白さに、我を忘れて遊び居たるに、チラリと見ゆる巡査の影、パッと散り行く賭博仲間、危くも我は贓物の嫌疑受くべきあぶなき處を、博徒の一人に掻きさらはれ、其處を逃れて玉鉾の道を急ぐに、哀しや我のみ棘の繁みに辷り落ちければ淋むしき路頭に野末の霜の消え入る許の心地にて待てど暮せど、そよ吹く風のそよとだに音づるものも訪ふものも絶えて荒野の蟲許、その翌朝やうやくに里の農夫に拾はれて、直ぐに鍬買ふ代となり、舞鶴町の金物屋の店に据はりて嫌に堅氣と聞えたる樫の錢箱に、入婿の身となりやゝ暫くは辛抱せしが、程無く主人の腰につき、好かぬ錢箱緣切つておさらば〳〵と西京さして旅立ちけり。

さればそれより名にし負ふ西京の賑はしさに心も狂ひ身も狂ひ、日中は芝居に夜は揚屋、藝子舞子の麗しき花の姿に憧れて、二日程を現に遊び暮らしたるが源にて、惜しや我が身を磨り減らし、憂き艱難の樣々に零落果てゝ、身の振方のよしあしも知らで難波の津に渡り、道頓堀なる角屋といふ汁粉屋に丸き我身を仕込ましぬ、されば餡の加減は旨さうなれど我が身は苣の藥味も知らず幾日を其處に、隱居の婆の巾着にしまはれて、難波津に咲かで此の身は冬籠り、何時かは春に逢坂や、葦分小船の障多きに隔てられ、一年を其家に侘びしく暮らしけるが、翌年の夏景色、三度笠横手に被りし富士詣の道者同勢

十五人の汁粉の勘定に、我等銀貨の代理人五圓紙幣の釣錢として受出されければ、世に慈悲ある道者の心の忝けなく、嬉しや我も旅の道連となりて東海道の名所々々を經めぐるならんと思居たるに、さはなくて奥底深き縞の財布にくるまりて胴卷の肌臭きに衝込められ、暗より暗に連れ行かれ、西か東か夜か晝か我身ながらも無我夢中、さるにても滊車にや乘りたらん、氣笛の聲數々起り、道者衆が折々珍しい頓狂聲して、琵琶の湖水や、名古屋の城、それ天龍川、大井川、富士は見えたか、など語ひ合ふも我には見えぬ哀しさ、軈て鈴川と呼ぶ驛夫の聲と諸共に滊車は止まり、我はとある宿屋に連れ行かれ肌に付きたる其儘に一夜の間恐しき鼾の聲のみ聞かれたり、明朝始めて胴卷より自由の身となり、日本晴の心地となりいでやこれより富士の姿を眺めんと思ふ間さへも無情なる宿屋の亭主に抑えられ、口惜しや又も錢箱の穴より眞倒落となりにけり。

如何に爺殿種々の目に逢へば遇ふものかな、さぞや我身の來歷面白からずと聞き飽き給ふべけれど、此からが花なれば兎にも角にも談話の續聞き給へ、されば錢箱の底に銀の此身を埋もらし、卑しき銅貨と寢起を共にし、玉石混ぜらるゝ口惜しさよ、無念を忍びて偏に亭主を恨み居たりしが、忽ち天運廻り來て五日目の夜といふに宿求めたる西洋人が憐に、算盤取りて利を釣錢の亭主の手より救ひ出されて、連れ行かれ、停車塲を一づゝ後に捨て行く汽車の旅、やがて横濱にと着きにけり。

此の西洋人といふは丈高き男にて髮赤く目は青けれど、顏の色は我等にも劣らぬ白妙の富士に名高き、日の本へ漫遊の客、髯むしやでも我には恩ある命の親、二にはあはよくは外國にまで供をして、春風の音にのみ聞く龍倫巴里の繁昌を一見せばやと念じゝこと〱空頼め、金貨務とやらにポンと引替へられ、名殘惜くも此人の手を離れ去りぬ、それより我は月給となりて銀行員の家に往き、盆の拂定に米屋へ渡され、藪入の小遣錢となりて小僧殿に貰はるゝやら種々の可笑しきことにのみ逢ひけるが、終に十九日の朝、一年に二度のみといふ顏色して勇み立ちぬる小僧殿に連れ出され、乘りて行く汽車の廻轉の川崎驛に止まりし時、それ掏兒よと車内の騷動に、小僧殿も怖氣立ちけん、懷に兩手差入我をば堅く戒め給ふ心根のいとしぼらしくも難有く、瞬間に大森品川も通過ぐれば新橋や、渡り渡りて八年目花の都の故鄉に歸り來れる嬉しさは飛立つ許の思にて、床しなつかし我等に緣の銀坐街、京と日本の兩橋も我を迎へて人形町、幼稚遊も慕はれて、淺草橋や廐橋心の勇む駒形堂を打通り、岩綱の行いては歸る雷門へぞ着きにける。

先づ觀音堂に懷中ながら參拜し、小僧殿と諸共に奥山に玉乘、輕業、犬芝居を覗きては日の永きを忘れ宮戶座をも見物し、團菊二人の影坊主、また〱藝拙けれど久振、我にはいとゞ面白く、これより我は小僧殿の懷を別れ興行主の手に入りしが、其夜圖らず小屋師仲間の財散に、此世の惡魔と呼ぶ浮女の手に入り、二世を契し間夫にさへも渡さで

簞笥の内の日蔭の身、月日に何の關守なく歲つまれば此身もつまり、永の暇を鳥が鳴く東橋なる呉服屋に住込む身とは成にけり、さればそれより此家の隱居が頭巾求めし其釣錢に、附き纒ひ來てまつこの如く同居の住居、爺殿と計らず逢ひし嬉しさよ、先づや我が長々しき身の上話も畢へたるが、爺殿實にも味氣無の世ならずや、昨日今日變り行く瀬の飛鳥川、明日よりはその泡沫と消てゆく、我等の末こそ悲しけれ、これから爺殿、面白き話聞かせて我等が憂苦を慰め給へ。

されば其事、我等の經歷話といふは頭領のやうな面白きにはあらねど、我も今度の改制に逢ふて五厘銅貨に後式讓り世に無き人となるの悲しみはゆめ〳〵頭領の嘆きに變りなく、思へば、いでやこれから我も經歷話を一通り、此世の語り納めとやせん、我は知らる丶寛永生れ、三百歲の壽命は生延たれば、その間の有爲轉變、幾萬人の手に渡り、幾百回日本國中を經廻りしか我さへ數へ切れざるを山鳥の永々しきは欠伸の種、我は唯だ身に積み重ねし履歷の一節を夏の夜の短く話し參らせん、抑も我は頭領と生れも素姓も違ゐてあれば志も自然と異り、一文二文とあはれ不便の身なれども、浮世を渡り乘ぬる人には重寶がられ、糊買ふ貴人にも便多かり、されば餘裕乏しき下流の人の手にのみ渡りて、頭領のやうに粹な場所にも洒落た筋にも持て囃されぬ代りには、我れ等を命の次に大事がる非人乞食の小屋には幾度となく出入し、一文と云はれたる昔も、一厘と呼ば

る丶今も、權門貴族の玄關を潜りし事を厭ひ、妬んで多く貴家の敷居を踏ぎて、昵のお菜の鮭買ふ足となされたり、我等を湯水のやうに粗末にあしらふ贅澤者とは一日も起臥したることなく、塵積れば山、一文から仕上げし儉しき人とは苦樂を共にしたれど、曾て月給となりて下りし事無く日給となりて錢緡で投げ出され、賄賂となりて大人の家に往きしことなき代りには小遣となりては小供の手に渡り駄菓子買ふことには數々使はれたれど、綾羅飾繡、姫君樣の紙入に肌觸れし事もなく、生來の一酷、管らぬ保養沙汰を敵と心得、何時も堅木の錢箱に身を持固めて夢にも浮たる慰を思はず、されば一度も盜賊、掏兒、放蕩男、猥連女の心を喜ばせしこともなし、唯だ我は淸貧にして樂む如き人にのみ持扱はれて、徒草の露程も身を濁せしことも覺無ければ、十返の松の命も保ち得たるぞかし、我が世渡りの内いとゞ嬉かりしは賽錢となりて産土神や菩提寺に供へられ信仰厚き爺嫗の細き心を安めては又汗水たらして稼ぐとすれど追付かぬ貧しき人の苦を癒し、ばら錢に入りて二合のお米を前掛の蔭に忍ばする功をも知らで、世の中は我を一厘の老耄と蔑視めど些細ながら我が力にて廻らぬ世帶に油さしたる例は幾何ぞや、富める人にても家の一隅に吊して利金の殖ゆるを喜び、門の敷居に打つけられては福の神の舞ひ込むを待つ、捨小舟寄邊渚に泣き暮らすあはれの孤兒、右や左の合力を祈る不便の不具者、今日は筑紫潟に、明日陸奥に彷徨ふて、身をも心も落着かぬ流浪人や物乞があはれを

告ぐる手の内に、我等が宿るを、撫でつ擦りつ餘念なく、此身を命の綱と賴むぞかし、昔は我身一人にても隨分やつて行けたれど、明治の御代となつては駄菓子屋の鐵砲玉一つがやつとの身上、今になつては五厘銅貨に切り上げられ、果敢なくなつたれど、我は此世を眞面目に送る志望、頭領は蕩樂三昧に月日を重ね、品行定まらで我儘勝手に世を振舞ひたれば、銀貨の相塲の下落も其筈と京童に謳はれて世に無用身となり給ひぬ、我は世を辭してもよき年なれど、つれなき人と交りし功德にや、我等はまたも此世に用あるか、今暫くは假の宿、釣錢となりて山の神、報謝となりて乞食の手に往來するも、主が主なれば窮屈なく、臂を曲げて陋巷に眠る、貧の交り亦樂しからずや。

此長物語ありてより一厘錢のみは暫く此の巾着に殘りて蕎麥代の端錢にも出で行かざりしが、銀貨は何處に行きにけん影さへ見えずなり、巾着の內は間も無く數多の銅貨と變替り居たりけり。　（完）



雛孔雀

金子春夢譯



此一篇はルーマニヤ皇后エリツベット、パウリン、オツチリヤ即ち文學上の異名たるカアメン、シルヴアの著に係り近著の某新聞にあり題して「ゼー、バーニング、マウンテン」といふ、少しく小説的の結搆なれど實話なるが如し、后の才はセルヴイアの先后ナタリーの美と中央歐羅巴の双璧と稱せらる、后當年五十四歳、國家多難に際し辛苦の生涯を過されしも文思綽々餘裕あり今尚ほ筆硯益々勇健なり

（上）

オウストリヤとホンガリーの間を境するカアパス山脈中の一村落に、パアウナと呼ぶ容顏美しい乙女があつた、其の名のパルウナといふのは、雛の孔雀の語で、氣高くて可愛らしいといふ所から起つた。

目がぱつちりと大きく、眉はすつと三日月の形をなして、鼻は稍々尖つて、口元はちいさ

くはないが能くしまつて、話をする時や笑ふ時に、光澤があつて牛乳の色を爲した眞白い歯が、二列並んで如何にも美しい。黒い捲髮は丁度冠をかぶつたやふに頭の周圍をまはつて、丈がすらりと高くて、いかにも上品が風采がある。彼女はいつの頃よりか、タウナスと呼ぶ男に心を許し、村の舞踏會や、日曜日毎に「ホラ」(會堂)で會ふ時には、彼に笑顔を向け、また彼の談話に耳を傾くるやうになつた。パァウナとタウナスとの間に、親しい關係がついたとの事が、村中の評判となつた頃は、若い男の間に嫉妬が起つて、愈々彼男がパァウナと結婚の約が調つたと明になつた時分には倍々烈しかつた。結婚の約束が調ふと間もなく戰爭、實に恐しい戰爭が始まつて、タウナスも聯隊に編入せられてダニーブの河畔まで進軍した。パァウナは他人の前に泪を飮み込んでタウナスと別れた而して誰一人として彼女の心中を察して慰むるものもなかつた。それから.彼女は戰爭の樣子を第一番に聞かうと樣々の手段を盡したが、其第一報が達した時は、村の入口へ行つて、酷く身心が弱つて其所に立つてある石の十字架に倚りかゝつた。

それからパアウナは眠から捨てられたのか、夜中まんじりともしないやうになつた、終夜蠟燭を點して何だか意味有氣なのは、幽靈――傷だらけで、今にも死なうとする許婚の男が、毎夜枕邊に立つて彼女を苦むので、それを避けんと室内を明るくする手段である。

一夜、恰も世界暗黑、パアウナはまだ衣服も着代えないで蕭然と寢床の一端に座つて、小屋の外に微な跫音か聞ゆるのと、誰かゞ忍び寄つて小さな窓から内の樣子を覗き込んで居るのに氣がつかないほど、深い思案に沈んで居る。

彼女は自分でつくつた此愛らしい繪のやうな境遇にあるのを忘れたやうに、兩手を膝にかけ俯向いてゐたが、何かはなしに暗黑の方へ向いて大きな眼を一ぱいに開いた。

誰やら柔にコツ〳〵と窓を敲くものがあるので、はつと驚いて立ち上つたが、あはや發せんとした叫聲を抑えてわざと靜に窓外に頭を向けた。

窓外に眼を放つと直ぐに身躰か衰弱したまで戰爭を氣遣ひ又戀しいと思ふタウナスが、其所へ悄然立つて居るのを認めたと同時に、靜に彼女の名を呼ぶ聲が聞えた。

パアウナ、パアウナ、窓外へ來てくれ、私、私一人――タウナスだよ、何も心配する事はない。

女は此聲を聞いて戶の側に進み寄つて、男を入れまいと戶の鎖に諸手をかけた、だが内

と外とは戸一枚隔つるばかりで双方の距離は僅になつた。

乙女の力大夫に及ばず戸は排し開かれて、直ぐに二つの強い腕がバアウナの腰に投げかけられた此方は早手く押しのけて、

眞實にお前さんかえ、タウナスですか、誰かの惡戯だらう？。

と言つて冷々しい、男は燥急の樣子で、

バアウナ、しつかりしな、お前、指環に觸つて御覽、そして私の咽喉にある銀、此の銀の勳章を見な、ア、どうしたんだらう、不思議だ、お前か私に、これまでのやうなら、そんな事をいふ氣遣はない。

ちやア必らずお前さんか、でも誰が戰地から返しました？。

誰でもない。

誰でもない、誰でもなければ、何でお前さん此處へ來なすつた？、ア、分つた、もう戰爭が結局にでもなつたのですか。

と彼女はまだ戰爭は結局にならない事は知りながら、斯く問ひ返した。

いや、まだ戰爭中だが、私はお前の顔が見たくてたまらんので、密々戰地から歸つて來たよ。

私に遇ひたいため？。

とバァウナは苦笑をして、

お前さんは、私を戰爭から逃げ返るやうな卑怯者の妻と思つて居ますか？。

さも賤んだ耻辱の語勢。

バァウナ、お前の心はさうか、よし、私を追ひ返せ、能くお前は私の心を反古にしたなどうせ、死んぢまふわ！。

と男も赫となる。

それはお前さんの希望通りに……、だけどタウナス、能く私の言ふ事をお聞きなさい！、私は賤んだ人を夫にするのは嫌です。

ときつぱり言ひ放つ。

ふん全然分つたよ、お前は心が變つたな、いや、他に見代るものが出來たのだな。

何ですと、心が變つた、他に見かへた、お前さんよゥく考えて御覽よ、私の心にはお前さんより外に何にもない、かうやつて夜徹寢ないで居るのも、お前さんの無事を祈るからです、だけれど私は臆病者と夫婦となつた事は夢にも見ません。

バァウナは我心の底が男に知れず、變心と聞いて自烈と憤怒の餘り、兩手を顏に押しあて潸々と泣き出した。

バァウナ、私が歸つたら、定めてお前は喜んで、私をかくまふてくれるだらうと思つ

たに案に相違だ。

と男は怨恨の語氣。

私は恥辱です、恥辱です、私はお前さんと許嫁の情交とはなつてますが、ブセギー山が焼けた後でなければお前さんの配偶にはなれません。

と斷乎として答えた。

よし、それなら私が死ぬるか、疵でも受けなければ、二度と再びお前に遇ふまい、なアに遇つてどうするものか。

タウナスも斷乎と言ひ終つて、少時兩人はぴかりと闇の裡に輝くほど怒の眼を放つて睨み合つた。

折しも天の一方に薔薇色の反照が見えるのは、ブセギー山が火を起したやうだ、見る間に火の手が盛になり行いて一團の火焰天を焦して火花を閃す光景に、近隣の人々は窓を開けて、森に火がついたと聲するもあれば、山火事〳〵と叫ぶもあり、犬は彼方此方を駈け廻り吠へ、鷄は夜明とだまされて鳴き初めた。

バアウナは矢庭に男の肩を摑み、女に似合はぬ烈しい力で戶外へ押し出し、

「早く〳〵彼方へ行つてください、早く、そして顏を隠してよ、人に見つけられると悪い、私は死んで仕舞たいほど耻かしい！

と女は小屋の戸をば確乎と鎖し、蠟燭の明をふつと吹き消した。
女は心配な眼でタウナスが小屋の蔭に這ひ行くを見送り、ほつと太息をついて、次第に下火になり行く山火事を見詰めて、山が燒ける〳〵出て見よ〳〵と人々の呼び立つる聲に、パアウナは何の返詞もなかつた。

（下）

それからパアウナは非常に窶れて顏色靑ざめ、生來滑稽が好な彼女が決して笑顏を見せぬ、人がどんな面白い話をしかけても、一も答をしない、たゞ口も利かずに休間なく手仕業をして居るばかり。
忽ち風聞が村中に擴がつた、タウナスは山火事の晩に此村に歸り來て、而もパアウナと會話をした、慥に立聞をしたと言ふものすら出て來た。
こんな厭味な風聞がパアウナに聞かせに來るものがあれば、彼女は額に一ぱい汗をかき、脣を顫はして、
其夜は私の住居も暗くも靜でもなかつたが、では山火事があつたのか。
と空々しい返詞をした、パアウナの母は其事について心配をして居る。
それから間もなく身震するほど恐しい戰爭の報知が到着した。
彼女は此事を聞くや直ぐに我家へ駈け入り、少さな嚢を用意し、それに柔鞣包やら、其

他の用品を詰め込み手早く旅仕度をしかけた、母驚いて、お前どこへか行くのかえと尋ぬれば、

なに直ぐに歸つて參りますよ、阿母さん御心配なさらないで。

と彼女は輕く答えた。

＊　＊　＊　＊　＊

先刻戰爭が止んだ修羅場の夜景色、屍は積んで山を爲し、血は琢鹿の野を浸すかと思はる丶原一面、そこ此方に死人、負傷算を亂して打倒れ、馬も大地に倒れ痍傷に惱みて頭を前脚の間につき入れ、人は今はの斷末魔にもがき苦み、苦惱呻吟の聲哀氣に聞ゆれど、軍隊遙に無數の篝火を焚き非常を戒むるの外、淺茅が原に鳴よはる虫の音色も、生血に吸ひ飽いてか殺氣を帶びて、中天に冴え渡る月の色さへ物凄し。

一人の丈高い女姓、此物凄き戰場をば物ともせずに彼方此方を馳せ廻り、陣營を横ぎり敵も味方も一様に近づいては尋ぬ人を尋ね、夜の更け行くをも忘れて心をつけて一々死骸を撿め、手の指環と咽喉の勳章を目的とすれど其詮なく、物凄い死骸に出遇ひては總毛立ちて膽を寒からしむると數々なれど、女の一念力、敵味方の陣營睡眠に落ちて、萬籟寂として聲なきを便とし、折々タウナス、タウナスと低い調子で呼び立てながら死骸を踏み分け〱思ふ人を尋ね廻る。

天女のやうなバァウナの唇に、彼方に[illegible]れば彼女飛び行き、用意の水を含ませ、那
ぬる人かと思へばそれにはあらず、落膽して立ち上り、失望の悲に堪え兼ねて頭を打振る間もなく、彼方に又もや唸聲、飛び行きて介抱すれば其甲斐もなく又別人。

はや天明に近く、月の色は次第に淡く、東の空は白みかゝつた。

バァウナは尋ねあぐみ、尋ぬる精力も盡きたやうに萎れて歩を運ぶ折から、ふと一人の死骸に眼がついた。

死骸は重傷を受けたので總身血塗になつて、誰やら見分がつかないが咽喉から下へかゝつた物を、此の世の名殘にか確乎握り固めて、其一本の指には銀の色が曙光に耀いてある。

タウナス！

とバァウナは一聲叫んで死骸の側へ伏し轉んだ。

數分時間は起きも得られなかつたが、漸く我に返り張り裂く胸をおさえ、用意の水で死骸の顏を洗つて見れば、無殘、兩眼から小鼻にかけて一刀意地惡く切りつけてある、彼女ははつと眼のくらむほど驚いたが再び死骸の顏を洗ひ清め心耳を澄せば今にも絶えんとすれどもまだ呼吸あるに、あつとばかり喜悦の聲、手早く男の口に水を含ませ、手巾にて兩眼の瘡口を縛つた。

重傷の人は我名を呼ばれて蘇生へつたが、兩手を差し出し、バァウナの顏を探ぐつて、

オヽ、バァウナか。

といふも微な聲。

はい。

と女は泣き伏す。

此まゝ死なしてくれ、私は盲目だ、此世に生きて居ても仕方がない。

とぐたりとなる、バァウナは氣を勵まし、

確なさい、私はお前さんの妻です、力を落さないでください、そして靜に、靜に……

……。

＊　＊　＊　＊　＊

タウナスはバァウナに連れられて病院へ入つたが、彼女が夜の目も合せず誠實に看護をした效で、それから數週間の後、其重傷は癒えたが、兩眼は世界の何物も見る事が出來ない。

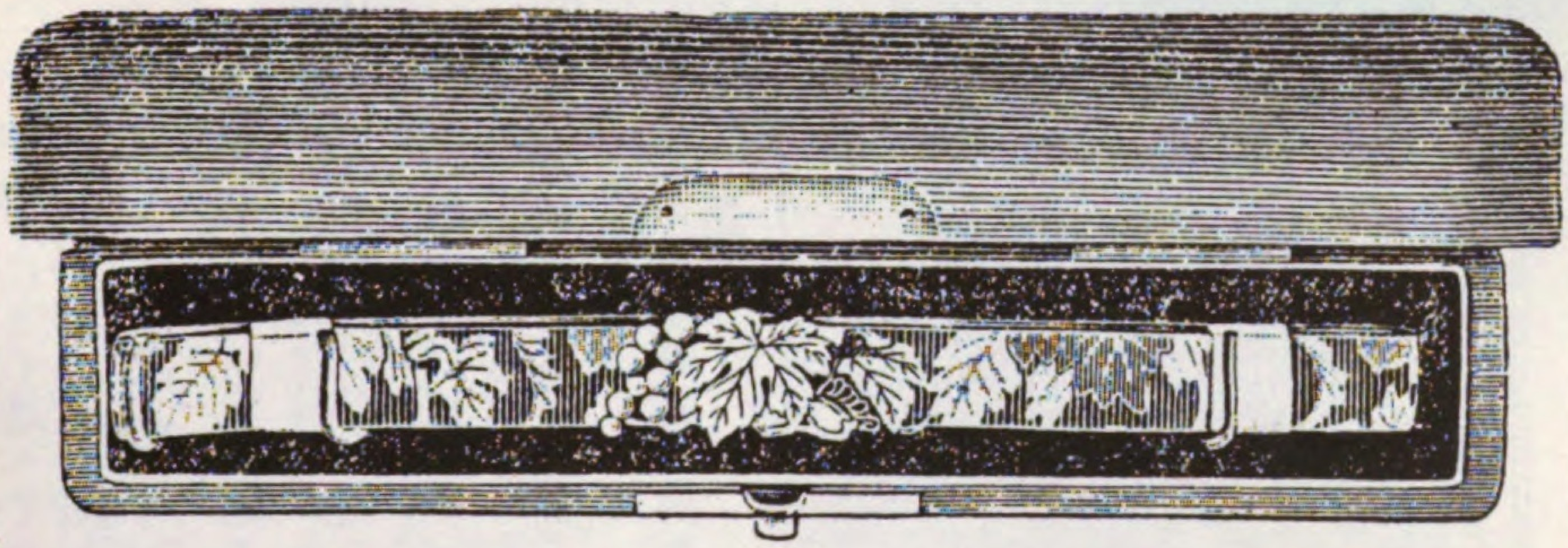
或日、此村落を徐に逍遙する一對の夫婦がある、男は盲目で軍服を着て、其胸には名譽の勳章を朝暾にかゞやかし、今一人の若い女姓は、親切に男の手を牽いて、道に遇ふ人

毎に嬉氣な笑を顔に呈し、
此人が私の配偶です、えらいでせう、御覧ください、胸の勳章
と言へば。
顔にも！
と傍から盲人は嘆聲を洩した。
斯樣な名譽があつて珍らしい婚姻は、曾つて此村になかつた、數多の人が此二人を取り卷いて、美しいバァウナの不幸を慰むれば、彼女は笑つて答えた、
私は自慢します、タウナスは豪傑です……神樣も讃めてくださいます、なに私が健康だから、二人が困ることもありますまい。

（完）



美術帶止



身の修飾に意を注ぐは婦人美德の一にして、人の敬愛も自づと加はり、譽も幸も光る身の又の美飾と謂ふべきなり。されば天の成せる麗質にても、その容儀に心を凝せば玉もいよ〳〵光を增し、花も一入の香り添へて優にやさしき品格は誠に愛嬌の源なるべし。弊堂年來美術裝飾品に心を碎きて、皆な時樣に適ひたる品のみなるが、爰に又た此たび新案の美術帶留は、意匠を上品なる古代の模樣に採りて、紐は稀珍の綾織、金具は黄金白銀又た青貝の精巧彫牡丹芍藥菊さくら、くさ〳〵の四季の名花に、金剛石眞珠その外の寶玉を鏤め、世に譽高き美術家が心を籠めし品なればこれを召させたまふ御婦人方は、實に錦の上に花を添へたる美くしさ、一入優にやさしき容儀を揚げさせ給ふべしと云爾

定價 一金五圓以上●五十圓以下
一●餘は御好み次第調製可仕候

豫て御需要の御進物用切手の義今度優美なる色紙形に調製候に付爾來御用の程奉願上候尤も切手御持參の諸君へは備へ品は何品によらず叮寧に御引換可申上候以上

東京神田須田町
鼈甲珊瑚珠類小間物商 長岡商店
（電話本局三五〇）

東京下谷池の端仲町
貴金屬及美術袋物商 玉寶堂
（電話本局九六五）

全國有名の各袋物商店小間物店に於て取次販賣す

（明治廿五年九月十四日遞信省認可）（明治三十年八月十日發兌）東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 株式會社秀英舍印行